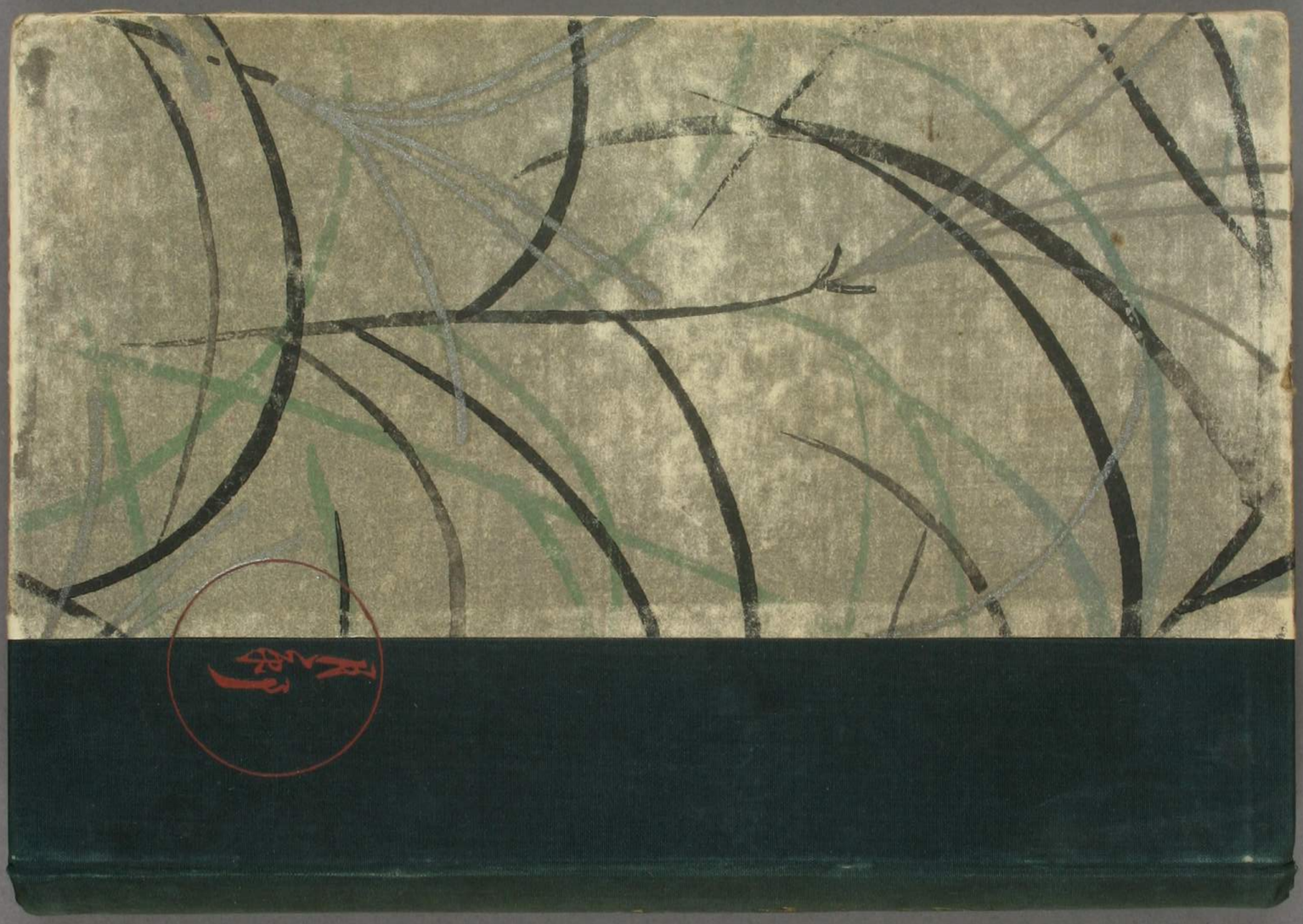
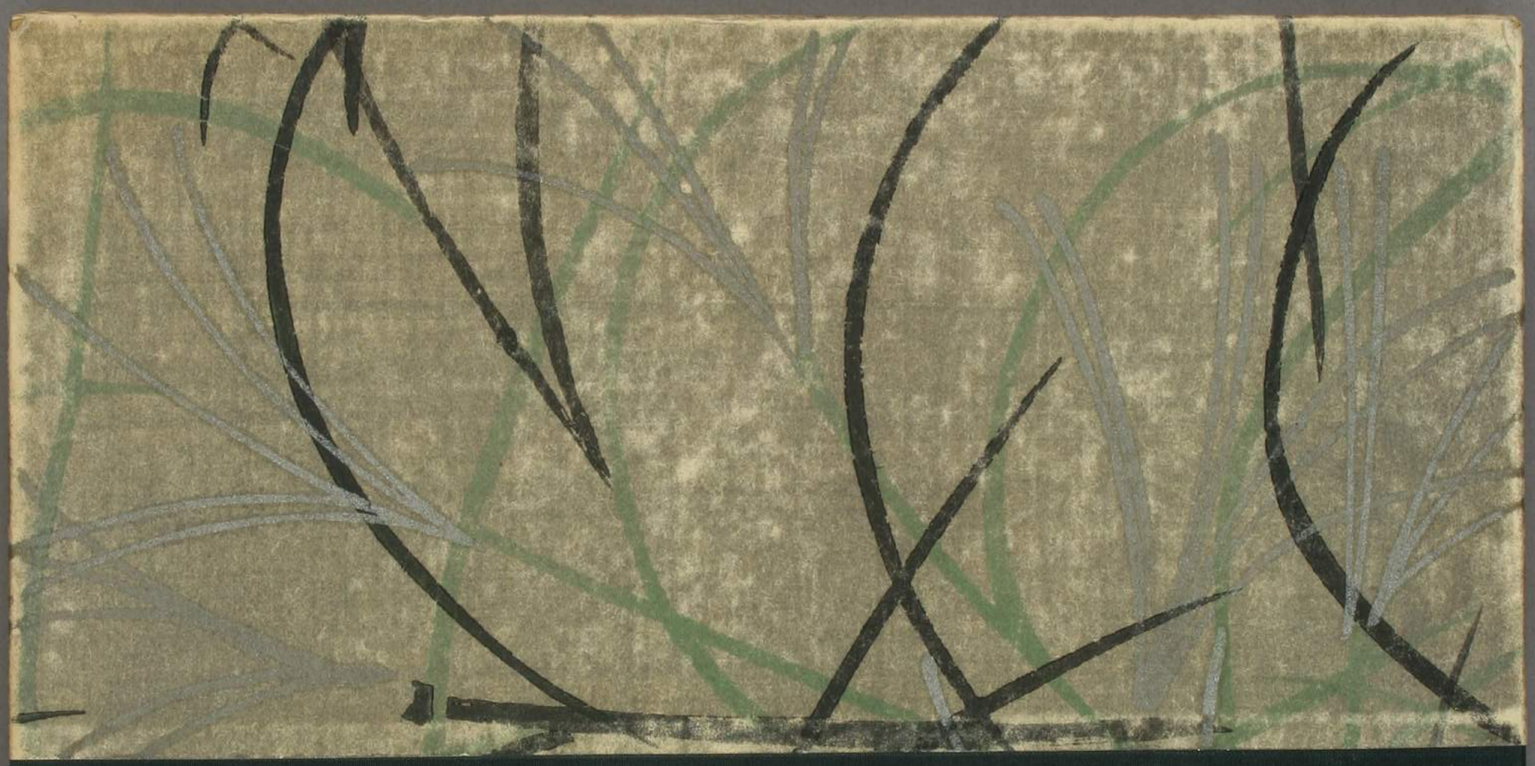


康節集



康郎詩集

特製七十五部の内第二十七號

目錄

落瓦賦　一
明治三十二年
嵯峨野　三
李青邁　二五
大雅堂　三〇
鶴鷺盃　三九
不識庵　四三
濱邊の盃闌盆　五一
明治三十三年
三樹雜詩　五三
明年三十四年
嵐山の奥にて　五五
四行庵　五六
金福寺　五六
雜詩　五七

裾野　五九
シェレイを吊ふ　六一
杜少陵　明治三十五年　七七
人神賦　九二
蘆白　一〇三
佐保姫　一一一
桔梗原　明治三十六年　一二六
飛雲辭　一二九
醍醐賦　一四七
花寶　明治三十八年　一六三
妻あらそひ　一七〇
豐の夢　一八四
木蓮の一片　一八六
芭蕉の葉　一八七
羅浮仙女の嘆　一八八

總合佛賦　一九八
夜半の水　明治四十四年　二〇六
比良瓜　二〇九
新の息　二一三
いのち　二一四
江口　明治四十年　二一五
散文詩
月の曉　二一七
幻住庵　明治四十一年　二一八
夏の海　二二一
佐保村　明治四十二年　二二三
冬の春日野　二二五
龍安寺　明治四十三年　二二六
命の花園　明治四十四年　二二八
蟲聽　大正元年　二三〇
公園の夜の曲　二三二

夕映　大正二年　二三三
停車場　二四四
春の月　小唄　二六
寒牡丹　二六
慧春の火定　二七
童女松原　大正四年　二四
流こゝろ　二六
ダリヤ　二八
短歌　二九
短句　二五
胡蝶軍　明治三十七年　二六
後の羽衣　歌劇　明治三十六年　三一
なろち　同　明治四十四年　三七

月郊詩集

落瓦賦

秋は舊都に立ちにけり、
千代も落葉となりぬらん。
瓦拾へば苔むして、
桐か、葵か、蝶見えず。

宮も藁屋となりにけり。
城に夕日のかげ落ちて、
山の古寺暮早く、
泣くはつるぎか、松風か。

吾身ひとつと思ひしに、
うきはこゝにもありけるか、
經の裏見るともしびに、
降るはいかなる雨ならん。

身こそ心のまゝならね、
いかで想は限られん。
愁のみ知るかなしさは、
むかし想うて忘れなん。

いつまで眠る東山？
いよ〳〵清き鴨河や、

昔を語れ、我は今
人と離れて、なれを友。

朝日將軍、源九郎、
猿面冠者、高平太、
榮えしさまはいかならん。
奢りしさまはいかならん。

脆きは人のこゝろかな。
山にかためしつはものも、
こゝの春にはとけにけり。
藤は都の男かな。

花は人より強かりし！
咎は花にもなかりしに、
花をかざして色競ふ、
男も顔は白かりし！

歌は香へど門寒き、
梅吹き散らす高笑ひ、
黒き男も逐はれけり。
鄙に學ぶや雛祭。

飯をこぼせは跡拾ひ、
九年、三年、八幡の
親子は草を刈りにけり。

花を守るはすがめかな。

花は嵐を呼びにけり。
酒もくされて盃を
奪ふはらから、やからさへ、
血汐白河染めにけり。

黒き炎は立ちにけり。
風は一夜に止みしかど、
またも燃えつく藻壁門、
鬼は手を打つ六波羅や。

虎は荒野へ走りけり。

龍も馴れては花に醉ひ、
髑髏叩きて日を招く、
父は子よりも若かりし！

孫は驚く水鳥の
風に落ち行く秋の葉や。
木曾にそだちし深山木も、
京のしぐれに染みにけり。

色はかはれど堀川に、
舞の袖ふる白拍子、
ゑづの小手巻くりかへす、
戀の曲こそはてなけれ。

誰に習ひし、鬼武者は
寄らず、來らず、來れば去る。
あづまの花は針あるに、
木の實も早く腐れしに。

三の鱗のなまぐさや。
花も血に染め、雪汚し、
月に照らして錢あざる、
それも天狗に食はれけり。

酒は亂るゝ不禮講、
打つや鼓の音高く、

破れ裂けても寄り來る
つはものどもは誰々ぞ。

河内男は堅くとも、
冠似合ふは左中將、
それも爭ふ足利の
をとゞひにこそ取られけれ。

牛の車の幾めぐり、
取れば爭ひ、人倒し、
獨占めては、色に落つ。
深けて通ふは執事かや。

こがね、ゑろかね、うてな立て、
君は茶を飲み、花ひねる。
叛け、家增す六分一、
三尺坊も鵜飼舞ふ。

御所の盃、山の脚、
こゝに受くれば、洲の股や、
川はかしこにみなぎりて、
車首引く十餘年。

宮もゑげみとなりにけり。
築地出で入る犬の子に
破戒頭陀さへ嚙まれては、

田舍商人毒ひさぐ。

箱根の峰に馬立てゝ
人の心を攪るは誰そ。
筑摩の川に龍飛んで、
雲霧裂けつ、また結ぶ。

吉法師、吉法師、
なれぞまことに早かりし。
碎く一夜に桶はざま、
美濃は小さし聟引出。

早く起きては、早く臥す、

短夜告ぐる一聲や。
殺せ、殺さん、ほとゝぎす、
塚はいづくぞ、本能寺！

三日晴れしも山崎に
雨は定まる大德寺。
張るや聚樂の綾錦、
織る機の音を今や聞く。

三河の聟に太刀持たし、
六十州のものゝふを
寄せて見下す夏の日は
四海ほしても足らざりし！

草鞋結ふ手に明裂きて、
淨土與へん曾呂利より、
御所の花はき、大茶の湯、
利休は娘惜むなり。

大佛先に崩れけり、
阿彌陀か峯も燒けにけん、
烟は上る薄月夜、
いしずゑのみぞかたみなる。

耳塚いかに殘りけん。
血天井の痕稍消えて、

小町踊や、伊勢踊、
三百年の春の夢。

守る斧の柄朽ちぬ間に、
白き碁石はくづれけり。
黑き石よりどよめきて、
雪と飛びちる櫻田や。

黑船の笛聞こえけり。
川原に晒す木像に、
二は足せど猶動く、
將軍塚の最後かな。

山の法師も世を憂ひ、
川の詩人も筆を投げ、
公卿も太刀拔き、馬うつて、
錦の旗は東指す。

都空しくなりにけり。
苔と古り行く千年の
春を殘すはたをやめや。
秋は野山を占めにけり。

守りがほなるもみぢより、
赤き三十三間の
堂に集まる千體は

いかにいつまでものいはぬ。

比叡は近くなりけるに、
東寺は町の西となり、
龍も飛び行く禪堂の
中にさびしき阿彌陀佛。

空也と鐘は鳴らしゝが、
色ある珠數の緒は切れず、
妻を抱きて釋迦笑ふ、
天竺よりは肌寒し。

妙法一夜火ともせど、

蓮華は鳥も飛ばしけり、
聲はあはれの虚無僧の
編笠何を忍ぶらん。

葵かざして加茂詣、
駒は競へど塵立たず、
扇かざして祇園會や、
ちごの化粧ぞ美しき。

神の社の杉古りて、
屋根に松生ふ樓門の
朱は剝げても朽ちせぬは、
いつくの内匠作りけん。

惡魔睨みて竝び立つ
仁王は佛師親子とや。
無き名傳はる山水は
胸の中にぞ聲ありし？

松を叩きし琵琶の音は
白き泉に流れけん、
西へ行くともとゞまりて、
文の紫色さめず、

捨てし反古さへ拾はれて、
人はつれ〳〵ならねども、

山のいづくに埋もれて、
鬼に讀まるゝ文や無き。

梅雨に銀沙はくづれねど、
芭蕉野分に裂け易く、
炎草紙を好むなり。
水より寒き世の流。

殘すこゝろはいかならん。
心ありても空となる
地には常盤もなきやらん。
天の月日も消ゆといふ。

闇はふたゝび明くるとも、
後の光に山見なば、
起つか、眠るか、いくばくの
峯はむかしを知るや否。

盡きぬさかえを誰か持つ。
朽ちぬ光を想うては、
朽ちし柱に文字ゑれど、
落つる瓦に雨洩らん。

落つる瓦はよしやよし、
文字は心の影ならん。
うつゝのうてな朽つるとも、

理想の宮ぞいとあかき。

一は有るを抱きては、
無きにながらふ心こそ、
今も昔にかよふらめ、
後もはからず合ふならん。

泣くも、笑ふも、物云はぬ
天に問ふとも甲斐ぞ無き。
答へがほなる瀧よりも、
胸の泉は盡くるまじ。

汲めや、飲めや、我と我

養ふ酒にいざ醉はん、
長生殿を我かけば、
不老門を人つくれ。

嵯峨野

こゝは名に負ふ嵯峨野とや、
げにあはれなる秋の色、
ところ知りてか女郎花、
露の涙をたゝふぞや。

嵐にかよふ琴の音は
牡鹿呼びよす甲斐も無く、

ゑぐれ待つ間の琵琶の聲
晴るゝ時無きあはれさよ。

うき世のうきはうつくしき
人こそ殊に身には知れ。
うきの故にやうつくしき、
うつくしき故うかるらん。

うきの故にやうつくしき？
さらばうきをも厭ふまじ。
うつくしき故うかりせば？
うつくしき故うかりせば！

櫻にほへど春と散る
淵に沈みし宮女あり。
薄招けど秋に逢ふ
陰に隱れし白拍子。

戀もなさけも知るものを、
などや男は捨てにけん。
才もすぐれし女さへ
草紙枕に眠るなり。

こゝろ捨てゝも捨てられぬ
すがた清きは誰爲ぞ。
野邊の花さへ名にめでゝ

手折る法師も落ちにけり。

心ひきては罪となり、
罪と知りても罪つくる、
罪はいづくに盡くるらん。
罪は此世のいのちかな。

かよへ百夜も百とせの
髪に雪は積もるとも、
花と思うて埋もれよや、
なさけ知らぬぞなさけなる。

罪か、めぐみか、生死の

後のすがたはいかならん。
塚を拂うて跡見れば、
月も嵐の山に消ゆ。

李青蓮

大鵬の賦は成りにけり。
楊州の花咲きにけり。
牡丹の中に太眞の
ゑみより動く春の風。
沈香亭に露散りて、
赤き氷は池に解け、
光とゞむる明皇の

手折る一枝に酒さめぬ。
　早くもて、早くもて、
千歳浮ぶるさかづきや。
酒星は天にいつも照る、
酒泉は地にも涸るゝまじ。
天地を賭けて競ひ飲む
かたきとなるは無きや無き。
　君召すか、君召すか、
臣はこれ酒中の仙、
遊仙枕は借らずとも、
吾ふるさとを離れんや。
念奴の歌にも飽きにけり、
龜年の聲こそをかしけれ。

金衣公子しばし待て、
飛ひ行く蝶は誰を宿、
かざしの花の梅と桃、
ふたつに分けて風流の
いくさはいづれ勝つやらん、
錦の旗を取るは誰。
かれか、これかと見る中を、
車引かしてちご來る。
臂にこがねの札かけて、
酒は斷つとも肥え滿ちし、
腹には何を藏むらん、
眼は何を睨むらん。
赤き藥を贄として、

金鷄の障推しやりつ、
旗は我のともてあそぶ、
母の乳さへ忘れけん。
長生殿に夜更けて
鳥よ、枝よと契るとも、
君より深きいとし子に、
心許すと人は云ふ。
わづらはし、わづらはし、
我醉ひぬ、眠らなん。
三百盃を過こしけん。
去れや、去れや、皆去れや、
楚王の雲雨よしやよし、
玉山我と倒るなり。

蜀道は難くとも、
天に登りて、月日見ん。
また書けと？　また書けと？
さらば書くべし、君見よや、
先靴脱がせ、高力士！
楊國忠、硯持て！
貴妃の口に筆呵して、
祿山の面に墨ぬらん。
遁るゝな、遁るゝな、
君の眼を遁るとも、
吾筆いかで遁れんや。
待てと、擲つしづくより、
變るすがたは金毛の、

獅子ぞ躍りて飛びかゝる。
あな恐ろしと、倒れ伏す、
貴妃を飛びこえ、君も嚙み、
尙も進めは白浪は
殿より高く吹上り、
牡丹飛び散る汝風や、
鬣ふるはして鯨寄る、
そびらにのれば青蓮は、
夢のあなたとなりにけり。

大雅堂

祇園林を春染めて、

山をいろどる土佐の筆。
眞葛が原の風香ふ。
狩野も酒をや過ごしけん。
醉うて來りつ、醉うて去る、
浮世姿は祐信が
花に衣紋も光琳の
扇鳴らすは誰ならん。
夜櫻や、夜櫻や、
月を忘るゝかゞり火に
うつる舞子の袖赤く、
雪を踏み行くむらさきと、
歌も浮かるゝ其ぬしの
おぼろは雲の咎ならで、

すだれさゝめく三味線の
音は雨にや習ひけん。
よしや豆腐は淡くとも、
切る手やさしき二軒茶屋、
君は西へか、東には
やまと歌さへ代々によむ
百合の姿は萎れしが、
咲くや娘も十五六、
町と名乗れど町に似ぬ
心の玉を誰か砥ぐ。
引けど許さぬ青柳の、
金に、位に、糸解かず、
金も、位も、名さへ無き、

畫師に盃思ひざし！

をかしやな、をかしやな、
みやげともなる大津畫の
吃に劣りし若者に、
何を見とめて與へけん。
龍の君さへ錢出さず、
水に流るゝ唐樣の
文字も似つかぬ看板に、
筆は箒とするぞよき。
仰げ繪馬堂、宮寺の
襖、床には古法眼。

富士には三たび登りけり、
またも登らん立山や、
白山ふみて三岳の
道は千里を行きしかど、
未だえよまぬ萬卷の
ふみは字無きもまたをかし。
水にきざみし經よりも、
水の綾織る幾まきや。
風に傳はる名は聞かで、
風の糸無き琴聞けば、
瀧も靜まる王摩詰、
今や樂師となりにけん。
竹はひらめく鳳凰の

羽は梅花の香かや。
六如美人を負うて去り、
かしらかへせど百餘年、
狂ひ、狂はぬ徐文長、
猿にはらわた千たび斷つ。
雲の林に分け入れば、
清閑閣ぞいさぎよき。
我は九霞の山探り、
中に千古のきこりせん。
紀伊の翁はいかづちを
觀ては竹枝を歌ふかや。
大和の友の色好み、
畫の具浪華に流せかし。

左近次郎の我儘に、
行燈貸さばや鬼出でん。
狐走らす謝春星、
君は三菓をむさぼれど、
見よや海には波遠く、
雪を乗せ行く小舟あり。
溪に空しき音するは、
先へ探りし奥やある。
我は重荷を捨てにけり。
山のいたゞき猶満たず、
斧を投くれば天裂けて、
落つるものあり、誰か知る。

妾は蘭を覺えけり、
梅を教へてたびたまへ。
墨は唇染むるとも、
君は素顏を厭ふまじ。
米と春着をかへてより、
夏の月まで竹も成り、
夕顏描く棚の下、
さこそ涼しくあるならめ。
秋の風には簪を
投げて聞きなば長き夜に、
君が氣高き白菊の
心いつかは解くるらん。
冬は窓さす雪あかり、

紙のふすまは破るとも、
松の操は母も知り、
なさけ聲ある書も傳ふ。
我は聲無き歌よみて、
こゝろ石にぞ凝らさなん。
鶴を子とするまでもなく、
山の奥にも香あり、
水に聲合ふつくし琴、
君も一ふし歌うたへ。

蓬萊山はいづくぞと、
思へば遠くなかりけり。
三十六の峰々を

行きては歸る吾おもひ。
鴨の流は淺くとも、
取られぬ月の靜さよ。
暦にあらぬ花ざかり、
たかどの朽ちぬ大雅かな。

髑髏盃

髑髏に盛りたるうまざけをかしや、
髑髏に盛りたる葡萄のうまざけ。
たしまぬ我さへ髑髏のさかづき、
飲まばや、飲まばや、飽くまで飲まばや。
一口飲めば、俗物いづく。

二口飲めば、天地はいづく。
いで〳〵舞はん、汝も舞へや。
見よ〳〵よもに影だにあらず、
英雄、奸物、才子も、馬鹿も、
聲無し、色無し、萬有空し。
立ち舞ふ我と、さかづきばかり。
髑髏も立てや、髑髏も踊れ、
葡萄盛りたり、髑髏も人かや、
葡萄盛りたり、我も髑髏か。
開けふたゝびこゝろの花びら！
燃せふたゝび戀の炎！
おもしろや、こゝちよや、
飲めば醉ふ、醉へば舞ふ、

醉鄕か、仙鄕か、
幻鄕か、魔鄕か。
美しや、美しや、
何やらん舞ひ、歌ふ。
姿有り、姿無し、
言葉有り、言葉無し。
聲有り、聲無し。
色有り、色無し。
香有り、香無し。
光有り、光無し。
影有り、影無し。
名有り、名無し。
性有り、性無し。

情有り、情無し。
心有り、心無し。
命有り、命無し。
我有り、我無し。
汝有り、汝無し。
始有り、始無し。
終有り、終無し。
常有り、常無し。
變有り、變無し。
道有り、道無し。
法有り、法無し。
こゝろよや、いたや、
うれしや、何や……

葡萄はさめたり、酒はさめたり。
ふたゝび汝か、ふたゝび吾身や。
ふたゝび天地か、ふたゝび俗物。
かの聲、この聲、名と呼び、利と呼ぶ、
かのものいづくぞ、かのものいづくぞ。
髑髏の盃、どくろのさかづき、
汝も唯のさかづきなりけり。

不識庵

霜は越路に滿ちぬらん、
能登は早くも秋ふけて、
城も碎くる波の音、

月は旗より登るなり。
馬も眠るか、篝火の
はぜて靜まる夜の陣、
晝のいくさに飽き足らで、
夢はいづくを襲ふらん。
鴈はいづくに行くやらん。
茲も吾手に落ちにけり。
越の古巢に誰か待つ。
げにや我にも鄕ありき。
我に從ふつはものも
月に忍ぶか、おもかげの
千々にくだくるおもひには、
雁のつばさも重からん。

あはれ錦も夜の花、
草を染めしはいくばくぞ。
待てど歸らぬふるさとの
人はいつまで憶ふらん。
髮は剃りても春日山
庵のあるじは太刀佩きて、
去りつ、來りつ、法の道
馬に鞭うつ二十年。
我も涙はあるものを、
何か惜まんものゝふの、
敵も味方も隔てなき
月を魂とも弔はん。
雲は迷ふか影隱す

闇に起るは笛の聲、
我も漸引かれ行く、
君はこれにぞ打たれける。
君の常には似ざりけり、
似ねどすゞしき最期には、
君もうらみはなかるらん、
我はひとりぞ恨むなる。
天狗東魚を嚙みてより、
北に、南に、足利の
鼎泡立つ秋津島、
蜂と起るはいくばくぞ。
無字の法知る新九郎、
跡はわつぱぞ守るなる。

頭陀の仇打つ嚴島、
鄙のいくさに終るらん。
何を傲るか桶峽間
夜半の嵐に裂けてより、
美濃に、近江の鹿逐うて、
京に先入る吉法師、
足はかゞむか皮履に
越の白雪能く踏むや。
げにや睨めば天が下
君と我との世なりけり。
君は靜に地を開き、
我は動いて山碎く、
鋒は相合ふ川中の

島ぞ二人の舞臺なる。
霧も晴れ行く筑摩川、
君は、うしろを襲ひけり。
我は前より水越えて、
見ゆる日かげに八千騎。
旗も躍りて風早く、
突けば亂るゝ水音に、
山も大浪打ちにけり、
君は早くも遁れしな。
殘り惜しきは犀川に
君の頭を得んものと、
おもて包みて白ぎぬに、
君はいづくと呼びし時、

つるぎ稻妻飛びにけり、
うちは月影裂けにけり、
またもかざせば駒躍り、
君と白浪立ちにけり。
時に望みし君が身も
今は中々惜まるゝ
諏訪のみづうみ底深く、
我はひとりとなりにけり。
さてもいくさぞいのちなる。
かたきなくては波白く、
草を燒くとも山寒し。
我もことしは痩せにけり。
今ぞ望むは中原の

君も心はありけるに、
我も空しく時過ごし、
よその小猿に與へけり。
いでやこれより八州と、
北のつはもの皆つれて、
富士をふるはす木がらしに
京の木の葉を試みん。
あはれ雪ぞふり來るか、
城もとりでも破り行く
途をふさぐか是非もなや、
天のてだてぞ攻め難き。
これは織田より、武田より、
討てど破れて、破られぬ

敵は空しく、また堅き、
有無の間のあやしさよ。
我も破れぬ陣立てゝ
有無の間も不識庵、
誰そや虚空の大將と、
呼べば月こそ靜なれ。

濱邊の盂蘭盆

夕日はくれなゐ西に溶けて、
淡路はむらさき幾重さめぬ。
ともしび一すぢ浪をよこぎり、
こなたの磯に寄れば碎けつ。

今宵はいざり火なぞや影無き。
浪も靜に、花も散らず、
星はいくばく、雲も迷ふに、
須磨の關屋月を許さず。

一、二、三、五、

火影出で來る蜑の苫屋、
小舟浮けて、帆さへ上げたり、
乘りて行くはあはれ亡き魂。

風はあらねど西へ流るゝ！
砂に立てたる花も流るゝ！
送火も消えつ、それも消えつ、

尙殘れるは誰そ、闇に泣きて？

三樹雜詩

東山、寺はいくばく、
雲過ぎて、曇り、かゞやく。
鐘鳴るは右か、左か、
宵月の下は清水。

將軍の塚は裂けたり、
稻妻やよもに飛び散る。
革命と呼ぶは誰が子ぞ。
古寺の曉の鐘。

橋の上行くは京女郎、
橋の下洗ふ友禪。
鴨川の末はいくすぢ、
かはせみの影もうつるや。

招かねど、螢來りつ。
逐はねども、またも歸るよ。
河風に我は睡らん、
吾夢に照るか、消ゆるか。

秋の雨今に降るなり。
きり〳〵す聲もかれ〳〵

山家集取りて開けば、
戀といふ文字ぞ目に入る。

花さきて、寺も知られつ、
花ちりて、山も消ゆるか。
一帶の綠霞むは
七橋を春や今行く？

嵐山の奥にて

月は今松に移りぬ、
前の山影となりけり。
驚きて跳る魚の兒、

見まはせば音はまたせず。

西行庵

櫻のかげに塚をよめば、
拂ふも惜しき花ぞ落つる。
そよや一ひらふみに入れて、
あけてながめん秋の暮に。

金福寺

閑古鳥いかに聞きけん、
一人行き、一人とゞまる。

行けばとて、果は枯野や、
とゞまれば、いつも山風。

雜詩

秋寒し、いでや登らん、
たかどのに日は斜なり。
鳥盡きて、山ものいはず、
欄干に消ゆる文字あり。

一聲は虫か、小鳥か、
耳立てば泉したゝる。
菩提樹に寂や質さん、

入相の鐘も幾聲。

雨晴れて、日はまだ見えず、
光のみ山に落ちたり。
山かげに烟一すぢ、
家いくつ、鷄の聲。

日暮れて、村も烟れば、
水のみぞ白く殘れる。
鳴きながら野鴨歸るに、
いかなればをとめ遲きぞ。

裾野

裾野は霧に隱れけり、
わづかに殘る夕日かげ
うつらふ富士をよこぎりて、
澤の中より鳥ぞ立つ。

きのふの宿はいづくぞや。
過ぎしは秋の風となり、
行く手に迷ふ薄烟、
今宵の宿はいづくぞや。

草も枕を貸すものを、
などてうまやに急ぐらん。
夜半のねざめはさびしきに、
月に契りし人や無き。

心無き身と誰か云ふ、
心余れは露に泣く、
たもと拂へばまた引くは、
花もなさけを知るならん。

花の陰にて春死にし、
人は果まで捨てざりき。
月の中にと秋を待つ、

我やいつまで迷ふらん。

鐘は一聲響きしが、
それも野末にふるひけり。
むせぶ草間のきりぐす、
あはれ一夜はつゞけかし。

シェレイを吊ふ

君も泣かるゝ身となりぬ。
君の姿も隱れけり。
石はかばねを寫すとも、
聲はいづくに歌ふらん。

水はいづくへさそひけん。
波の花にや色ありし？
風のしらべは鋭きに、
海の女神や笛吹きし？

友は遙に招きけん。
つばさ怪しき鶯や、
露も妙なる白百合に、
愛の涙と解けにけん。

君も失ふ樂園を
落つる天使となりにけり。

イブの姿は捕へしが、
元の戀路はいづくぞや。

秋風よ、秋風よ、
行衛いづくぞ、木の葉より
脆きうき身はうなばらの
波の花とも碎けちる
春の聲のみ殘しつゝ
世にはいつまで迷ふらん。
浦回さぐれど人あらず、
人あらず、人あらず。

白雲よ、白雲よ、

行衞いづくぞ、霰より
脆きうき身はいかづちの
音にわなゝく草の露、
月の足跡慕ひつゝ
世にはいつまで迷ふらん。
野邊をさぐれど人あらず、
人あらず、人あらず。

ひめひなよ、ひめひなよ。
行衞いづくぞ、螢より
脆きうき身は人知れず、
獨焦れて昇りえぬ
星の花園仰ぎつゝ

世にはいつまで迷ふらん。
澤邊さぐれど人あらず、
人あらず、人あらず。

山姫よ、山姫よ、
行衞いづくぞ、流より
脆きうき身は岩に裂け、
泣きつ、むせびつ、尚思ふ、
なれのおもかげ寫しつゝ
世にはいつまで迷ふらん。
谷間さぐれど人あらず、
人あらず、人あらず。

脆き姿はうきものと、
戀も捨てゝは西へ行く、
人はいづくに逢ふやらん、
君と語らばをかしきに、
逢うて甲斐無き鷲の羽に、
君の聲さへふるひけり。
彼は戀路を下りけり、
君はいつまで上るらん。

脆きうき身はよしやよし、
戀はうき身の外なるに、
捨てつ、あざりつ、皆迷ふ、
花の一林は奥深し。

いざや導け春の風、
すみれ、薔薇を分け行かん。
君も袂を引かれけり、
拂へ、あなたに誰か待つ。

うつくしや、うつくしや。
限りもあらぬ紫の
山に常磐の深綠、
花は茲にぞ咲きにける。
先に探るはノファリスか。
唐の才鬼も招かばや。
玉のうてなは寒からん、
茲ぞ不朽の花の園。

脆きうき身は今いづく。
脆きものこそ美しや。
脆き中にも美しき
魂の宿るぞうき世なる。
うき世歌へど人聞かず、
うき世捨つれば跡慕ふ
人のおもひぞいと脆き、
脆きうき世を悲しまん。

あはれ茲にて泣くは誰そ。
塵の界を離れしに、
塵の界をまた思ふ、
脆きなさけの美しや。

愛はこれにぞ籠もりける、
戀はこれより流るらん。
涙あらずば戀も無く、
戀もあらずば涙無し。

戀も、涙も知るものぞ
美しき神見るならん。
そよや霞の幕あきて、
光洩れ來る玉の露、
それぞ頭のかざりかや。
髪をふるへば雨となり、
袖に受くれば霜となる、
霧のうすぎぬ裾長し。

梅のかをりは肌よりも
櫻とけたるかんばせや。
眉は月こそ學ぶらめ、
星もほゝゑむ眼には、
長き常世の戀も照り、
日さへこがれて曇るらん、
頰はくもらぬよろこびの、
滿ちて溢るゝなさけかな。

薔薇ものいふ唇に、
聲は其儘歌となり、
ゑらべ妙なる音樂と、

聞けば望も遂げぬらん。
心しづまる「春」の海、
波は響の餘りかや。
手さへ柳のしなやかに、
さゝげ出だすは何やらん。

あはれ桂の冠や、
月の桂の冠や。
誰の頭に落つるらん、
見ればいづれも顏赤し。

ゑらべよきものの取れや、取れ。
聲は風にぞ消えにける。

姿よきもの取れや、取れ。
文字は水にぞ書かれける。

おもひあるもの取れや、取れ。
おもひ無くして何書かん。

涙あるもの取れや、取れ。
涙無くして誰か泣く。

戀を知るもの取れや、取れ。
戀を知らずに、何夢む。

眞を知るもの取れや、取れ。
眞と思へば、美と思へ。

茲はまことに別ちなく、
兄も弟もなきものを、
何をかれこれ求むらん、
冠着ずとも天使ぞや。

かつて夢みし色洗ひ、
茲の光に照らさばや。
見よや桂の枝茂り、
限り知られぬ林かな。

茲の桂を手に取れば、
刺して茨と血を流す、
下の古疵いかなりし？
君の頭に痕ありや。

痕はすみれの輪となりて、
血汐花ひくをかしさよ。
君のかんばせいとゞ尙
清き天使となりにけり。

君はキイツの身の上に
おのが身の上泣きにけり。
我は泣くまじおのが身を

君の行衛に忘ればや。

君はローマの亡き跡に
おのが恨も埋めけり。
我は埋めじ平安の
古き都にうそぶかん。

來れ茲にも蔦かづら
宮も藁屋も別ちなく、
ゑばし榮えしつはものゝ
骨の山々紫に、
血汐流れて明けく、
花も、紅葉も染めぬらん。

今も都か、墓原か、
いのちある間の花園か。

來れ、うき身の置きどころ、
清き心の隱れ家や。
清き心に身を責めて、
いのちかこたば來れかし。
平家も町の名となりて、
草鞋のみつる藤吉の
首も缺けたる大佛は
天津乙女も泣かざりき。

君も來たまへ、天女より

人に生まれてうきに泣く
美女は茲にも一人かは。
今や天女となりにけん。
共に雲井を飛ばんより、
昔かこちし花園に、
あるも、あらぬも別ちなく、
一夜歌うて、いざ舞はん。

杜少陵

痩せし身をなやむ吾驢よ、
秋の道降るは木の葉か。
うすごろもまたも破れて、

ふところの詩草ひやゝか。

筆執りて十とせ、二十とせ、
屈原の壘に迫れど、
汨羅さへ逐はれ、逐はれて、
吊はん賈誼もあるまじ。

梟のみ我を招くか。
落つる日の方はいづくぞ。
柳さへ枯れて烟らず、
ふるさとは山ぞ亂るゝ。

わが妻はいかにあるらん。

同じ世にあるも名のみぞ。
あればこそ土や嚙むらめ、
壁張りつ、落葉つゝらん。

をさな子はいくつなるらん。
別れては父も知るまじ。
母に似て泣くや、笑ふや、
たより無き風の寒さよ。

吾爲に彼は苦しむ！
誰爲に我は苦しむ？
もゝとせに足らぬ此身も、
よろづよに朽ちぬ文章。

此心誰に語らん。
曹劉は名のみさわがし。
青蓮は酒に狂うて、
淵明は菊に忘れつ。

よこしまの思無しとて、
孔聖は取りて編みしも、
忠孝の道は亂れつ、
國破れ、詩のみ殘らん。

城荒れて今に幾とせ、
旗は尙あなたこなたに、

星と散る石は骨なり。
玆もまたいくさありけり。

此骨も妻は待つらん、
此石も親は夢みん。
夢の子は石にあらぬを、
待つ人は骨と知らずや。

拾うても妻は知るまじ。
手に縫ひしきぬも血に染む。
折れし鉾誰に示さん。
親も亦飢に倒れつ。

泣く聲は我か、人かや。
絞りつゝ呑むは何者。
砂原に肉はくされど、
長安に價貴し。

惡少は飽きて死ぬらん。
姦雄は國に戯る。
楊州の花は散りしが、
曲江の柳舞ふなり。

いにしへもかくやありけん。
春秋の筆に懼れず、
盜跖は飽きつ、あたゝか。

其人ぞ野には飢ゑける。
堯舜も古き歌かや。
老莊の夢ぞ穩。
うつゝにはいつも爭ふ、
爭へば虎は牛食む。

牛の首、人のすがたか。
人の首、蛇のこゝろか。
强き者王となるらん、
弱き者餌とぞなりける。

聖人もつとめけるかな。

豺狼を馴らし、ならしつ、
虎の子に讓る冠も、
洪水に長く漂ふ。

桀紂の泡の戯
狼煙の音に消えては、
湯武さへ聖と浮びつ、
夷齊のみ餓ゑて死にけり。

周公も夢となりけり、
夢にさへ見えずなりけり。
王を射て、鼎叩けば、
父刺して、血汐飲むなり。

管仲を一人知りけり、
知られては何をつとめし。
天の下未匡さず、
東海を踏みしものあり。

劔掛くる友はありとも、
妻殺す夫いくばく。
衣刺す臣はありとも、
生きながら埋めし君あり。

此時の客ぞをかしき。
用ふれば、火にも入るなり。

用ひずば、つるぎ叩きて、
歸らんか、天下家あり。

國は六、舌は一に、
合はせては、またも破れつ。
秦關を風は越ゆれど、
易水に壯士還らず。

四の海祖龍攫みつ、
萬里まで這うて延びけり。
千歳の藥煎んとて、
道を說くふみを焚きたり。

ふみ讀まぬ馬は鹿なり、
ふみ讀まぬ猿は王なり。
鴻門に舞は亂れて、
虞氏の血に楚歌ぞ身に染む。

狗もまた次で煮られつ、
鴻鵠のつばさ一打。
雛もまた果は食はれて、
聖人と鷲は鳴くなり。

たかどのはくされ、くされつ、
草の屋の中ぞゆかしき。
こがらしに壁は落つとも、

谷川の氷解けたり。

鳳も起ち、龍も動きぬ、
ものゝふの春の錦や。
赤壁に炎はなさき、
五丈原星は飛びちる。

詐りて勝てば、敗れて、
北、南、かはり、かはるや、
二百年、雲か、烟か、
雨晴れて、唐の日ぞ照る。

太平のいさをいくばく、

舞の數七、九、
文の道茲に開けて、
千載の業ぞ成りける。

いかなればまたも亂れし。
いつまでか亂れ、亂るゝ。
謫仙は天に還りつ、
我ひとり泣きてさまよふ。

ものゝふはいよゝ狂はん、
えびすさへいよゝ襲はん。
西のかた風は鋭し、
北のかた雪ぞ烈しき。

かはる代は尙もいくばく。
民草はいつも苦しむ。
靜まれば膏絞られ、
亂れては血汐流さる。

くるしみぞ千とせなりける、
今に泣く聲も千とせや。
歌ふとも聞くはあらぬか。
此文字も塵とならずや。

あめつちもなさけ無きかな。
誰が爲に我を生みけん。

誰が爲に人を生みけん。
罪無くて罪にくるしむ。

見上ぐれば空は遙に、
月かげもいよゝ缺けたり。
見渡せば河も黑みて、
水音もいよゝ悲しむ

天道は大なるかな、
人情はあはれなるかな。
天道に情は消ゆとも、
人情に天を包まん。

いづくにかなさけ無からん、
人ごころとはに變らじ。
吾文は塵となるとも、
吾こゝろ人や知るらん。

此心いのちなるかな。
身は瘦せて肉は落つとも、
此心いつもあたゝか、
秋風は骨を吹くなり。

人神賦

雪の山いつまで高き、

楊子江いつまで長き。
ものいはぬ塔鷲はめぐりて、
死の海の波いよゝ漲る。
エデンの園はいづくなりけん。
エルザレム亦取りつ、取られつ、
バベルの臺と道は壞れて、
祇園精舍響のみなり。
豫言者の劔折れていくばく。
笑ひながらに人は生まれず、
泣きながら死ぬかばね叩きて、
白き、赤き惡魔踊るよ。
眞如王の骨虎に食はれつ、
釋迦牟尼の骨土に吐かれつ、

孔丘の魂何に飢うらん、
關帝の髯獨祭らる。
莊周をまた蝶は夢みず、
老邨は畫の關に留められ、
陽明の病誰か癒さん、
つたへても尙火とぞなりける。
　さびしやな、さびしやな、
中原は唯砂の飛ぶのみ、
北よりはまた胡迫りて、
長城は唯石の守るのみ。
南には早あるじ變りて、
因陀羅もまた力及ばず、
蘇利耶も今誰にかゞやく、

信度さへはた西に向ふよ。
　波立てよ、雲起せ。
　天裂けよ、地碎け。
炎の神よ落ち來れ。
嵐の神よ吹き上れ。
稻妻の劔打ち揮へ。
いかづちの鼓打ち鳴らせ。
日西山に傾きぬ、
東の時とならんとす。
東の洋の歌うたへ。
曙の姫長く待つ。
千よろづの神寄れや、寄れ。
つはものどもはいづくぞや。

いくさの神の跡追ふて、
西を突きしは誰なりし？
經を片手につるぎ振り、
北を突きしは誰なりし？
三千世界握らんと、
地獄突きしは誰なりし？
英雄はなが子なりけり。
今の男はいかにぞや。
鬼神はなが父なりし！
今の鬼神いかにぞや。
鬼も空しくなりけるか。
神も空しくなりけるか。
人も空しくなりけるか。

國も空しくなりけるか。
雪の山尙高し。
楊子江尙長し。
これも空しくなるべきか。
かれも空しくなるべきか。
なが思過ぎにけり、
咲く花に笑へかし。
なが敎弱かりき、
夏の日と强かれよ。
なが神は姿あり、
洪水と洗へかし。
なが鬼はなさけ無し、
木がらしと拂へかし。

世の教なれ生みぬ、
世の教なれ殺す。
復思へ、復想へ、
これぞこれいくさなる。
西東合はせよや、
思想の王と勝つは誰そ。
雲迷ふ、雲迷ふ。
西に走るか、東にか。
西は戀路の花に醉ふ、
東は死出の風に泣く。
西はおもかげ空に見る、
東は水の月も見ず。
西は星さへ數えけり、

東は銀の河渡る。
西は山をも碎き行く、
東は山の中出でず。
西は海をもくゞり行く、
東は海の波恐る。
西は嵐もたゝへけり、
東は雨の中に臥す。
西は入日の光追ふ、
東は朝日夢と見る。
夢さめよ、夢さめよ、
空しきは唯夢なりき、
現は心のかげぞかし、
花は靈の情ぞや。

樂しき園はぬしも無く、
神尋ねてもはてあらじ、
はてなき空を嘆きては、
詩人ぞ神を作るなる。
神はうつゝの作者かは、
神は理想のきはみかな。
輪廻の車進みては、
移り變るもいのちぞや。
うき世の風に身を鍛へ、
地獄の底の神となれ。
炎の波とちりながら、
神の光はかゞやかん。
月は水の上を行く。

雲を拂うて動けよや。
動くぞ生の力なる。
星は落花と亂るとも、
草の葉末に置く露に、
玉の宿りは事足らん、
心宇宙の鏡かな。
鏡と宇宙合はせよや。
寫る姿は曇るとも、
放つ光に霧晴れん。
夢を描けば夢ならず、
夢のうつゝぞ妙ならん。
幻の中花ありき、
うたかたは誰が影ならん。

炎其儘胸にしめ、
涙炎にそゝげかし。
活人劔に死魔拂ひ、
欲魔、身魔、天魔切れ
殺し盡して尙殘る
おのが力ぞ神馬なる。
鞭うつて進めよや、
英雄は今いづく。
鬼神は今いづく。
人こそ神となるべけれ。
神の力を展ばせよや、
神のなさけに包めよや。

蕭白

繪圖ならば、繪圖ならば、
　主水こそよかんめれ。
畫ならば、畫ならば、
　我ならずして誰かある。
我はこれ
明の太祖の十四世、
左近次郎、蛇足軒、
今こそ曾我の蕭白と
人は知らねど、鬼ぞ知る、
神も驚く筆なれや。

天の扉に墨塗りて、
地に落とされしをかしさよ。
天の祕密を地に洩らし、
塵に描いて示さばや。
解き得ずや、解き得ずや。
人吾龍を龍と見ず、
人吾虎を虎と見ず。
げに吾龍は蛇にあらず、
寶樓閣をめぐるなり。
吾虎は狗ならず、
雲井をかける虎ぞかし。
吾龍と、吾虎と、
戰へば天地鳴る、

天驚かし、地碎く
其中に祕密あり。
解き得ずや、解き得ずや。
人吾花を花と見ず、
人吾鳥を鳥と見ず。
げに吾花は色あらず、
空を染めたる色ぞかし。
吾鳥は聲あらず、
無より出でたる聲ぞかし。
吾花と吾鳥と
色合はせては聲となる、
空と色と、有と無との
其中に祕密あり。

解き得ずや、解き得ずや。
人吾山を山と見ず、
人吾水を水と見ず。
げに吾山は盆ならず、
雲のあなたに秀でたり。
吾水は泥ならず、
霞の奥に流れたり。
吾山と吾水と
影うつしては影うつる、
山と水と吾胸の
其中に祕密あり、
解き得ずや、解き得ずや。
人吾人を人と見ず、

人吾佛を佛と見ず。
げに吾人はけものより
外に出でたる人ぞかし。
吾佛は鬼ならず、
人と起き伏す佛ぞかし。
吾人と吾佛と
相集まりて世をつくる
境は空か、地か、海か、
其中に祕密あり。
解き得ずや、解き得ずや。
解き得ずや、解くべきか。
あはれ此上洩らしなば、
奈落の底に落とされん。

地獄に天や示すべき。
閻羅王も解きえずや。
解き得ぬ者は皆蹴らん、
王も蹴れ、鬼も蹴れ、
人も蹴れ、狗も蹴れ、
鳥も、蟲も、魚も蹴れ
これぞ吾涅槃なる。
尙解き得ずや、解き得ずや。
涅槃の床に我臥して
大てふ文字に仰ぎ見ば、
泣くか、笑ふか、聲々は
奈落の底に沈むなり。
雲か、山か、色々は

虛空の上に消えて行く。
月日も吹かば飛ぶならん、
造化の筆ぞいと弱き。
伎藝天女はいづくぞや。
吾筆ぞいと强き。
山の硯に雨灑き、
空の紙延べ、雲磨れば、
面白や一筆に
神龍は躍るなり。
十方界にわだかまり、
眼の光千代に照る。
稻妻と消えんとや。
其目こそ消ゆべけれ。

黑雲と變るとや。
其姿こそ變るなれ。
造化のうつゝ夢ならん、
吾夢こそはうつゝなれ。
夢となるとも夢なれば、
夢に夢見るうつゝかな。
　尙解き得ずや、解き得ずや。
解き得ずば、繪圖を見よ。
繪圖ならば、繪圖ならば、
　造化こそよかんめれ。
畫ならば、畫ならば、
　我ならずして誰かある、
　我ならずして誰かある。

佐保姫

春なれや、春なれや、
志良姫は行きぬ。
袖洩れし玉花、
六の花も散りぬ。
岩戸の關もあけたり。
いさらなみも晴れたり。
いざ行かん、雲に乘り、
谷風を先へ驅りて、
山よりか、野よりか、
里よりか染むべき。

おもしろや、いたゞきは
やたがらす踏みにけん、
若草の燃ゆるに、
谷間にはうすらひ。
そよや鶯の橋に、殘して、
かざみぐさ開かん。
野邊は早水鏡
誰が爲に磨くぞ。
根水ぐさくしけづりて、
綠にやゑどらん。
くれなゐに茲の山元
三千代ぐさよそほひ、
濃く薄く重ね〳〵て、

源な知られそ。
吾かづきなれに貸さばや、
夢見ぐさこそ脆けれ。
脆くとも美しき
いのちな恨みそ。
おもかげをまたも示さん、
かゝみぐさいづくぞ。
其人はいかになりけん、
垣に立つ影は墨染。
むらさきを松にかけばや。
若衆とも、女とも、
見る目にぞ色はありける。
折らるゝな、折らるゝな。

かざみぐさ

うれしやな、うれしやな、
姫君のめぐみ。
先染まる吾顔、
先香ふ吾袖、
うすらひは解けしか、
うぐひすはいづくぞ。
風は尙肌寒し、
雨は尙骨に沁む。
寒くともいとふまじ、
我はそも花の姉。
しめはとて嘆くまじ、
操こそ吾いのち。

色も香も知るは誰そ。
むら雀去れや、去れ、
鶴のみぞ許すべき。
立つ勿れ、雪と見ん。
宵月もいとをかし。
吾香にや醉ひにけん、
吾肩に倚りて笑む。
星も亦さびしきか。
吾むれに入れよかし。
遊ばゝや、あやなきに、
光にてなれを知る。
香にて我を知れ。
朝の露誰が落す。

光あり、香あり。
ながの影か、吾影か。
苔見れば、四、五、
空見れば、三、二、
水見れば、花ひとつ。

根水ぐさ

待ち給へ、我も行かばや。
吾髪も水にとゞきつ、
水拂ひ、なれとくらべん。
なれが結ふ髪は誰が樣、
吾髪はいかに束ねん。
此まゝに風にちらせば、
風も稍心ありげに、

いざなふをいかに答へん。
雨も稍なさけ含みて、
さゝめくはまこと、いつはり？
唯受けて、裾に落とさん、
袖ふりて、衣ほどかず、
白玉の姫に習うて、
うすぎぬにおもて包まん。
包みても、覗く燕よ、
吾心人に洩らすな。
夕日かげ水に入る頃、
我もまたなぞやほのめく。
うすぎぬの綠解けては、
鏡さへ染みつ、洗ひつ。

笛吹くは何の思ぞ。
動かねど、心動くよ。
さゝなみを袂叩きて、
招けども、芹は遮る。
絮ひねり、投げて飛ばさん。
うき草に、憎や、とまりつ。
春風よ、いざやつれ行け。
さにあらず、光さす方。
西山の松に宿るか。
ねたましや、影も消えたり。
春雨か、降るは涙か、
吾袖は一夜乾かず。

三千代草

一夜、二夜は淺しや、
三千代までもと思へど、
玉づさ誰につたへん。
かりがねや早歸りし。
虹の橋何渡すぞ。
きゞすも獨こがれつ。
日かげはいよゝうらゝか。
くれなゐいよゝこまやか。
餘りに濃しと識るや。
色より濃きはなさけぞ。
餘りに肥ゆと笑ふや。
滿つるは胸の思ぞ。
卑しといふは何者。

心開くや卑しき。
媚ぶといふは何者。
ゑみたゝふるは吾さが。
春風もよし散るとも、
ちるとも泥を染むらん。
春雨もよしぬるとも、
ぬるとも色はまさらん。
盃共にかはさば。
かんばせいよゝ照るべし。
いで〳〵奥にいざなひ、
塵の世避けて遊ばん。

夢見ぐさ

塵の世夢と見てしより、

うつゝともなき吾姿、
一重のきぬの糸解けて、
舞へば亂るゝ簪や。
八重かさねても尚消ゆる
いのち短き春の夢。
夢の間なりと美しき
いのちばかりは夢ならじ、
夢と消えても夢に見る
おもひばかりは夢ならじ。
夢か、うつゝか、うつゝとも
夢も見よかしおぼろ夜や。
かつらをとこも何迷ふ。
春のほだしは是非もなし。

雲を拂うて下れよや。
人の園生はわびしきに、
山のあなたも君あらば、
夜も眠らであかさなん。
嵐迫らば衣のみ
水に散らして吾魂は
君の宮居に飛びたやな。
天津乙女は妬まずや、
佐保姫君や責め給ふ。
許したまへや此世にて
いのち短きむくいぞや。
美しきのみむくいかや。
さては散るまで美しき

花のいのちに足るとせん。
あはれ吾身に先落つる
朝の光ぞいと清き。
襟を合はせば風吹くは、
殘る夢をもさませとや。

松見ぐさ

夢ばさめても、またも結びつ。
鏡うもれて、影はうもれず。
飽かで別れし戀や消ゆべき。
共にうつしゝおもてとゞめて、
君のすがたはまたも痩せたり。
吾すがたさへまたもしをれつ。
花いろごろもぬしや誰とは、

情を知らぬ人に口なし。
花となりては、誰か咎むる。
いざや飽くまで共に咲かなん。
あはれ互にいつか飽くべき。
飽かで咲きても、春は暮るゝか。
花のすがたぞいとゞはかなき。
鏡みがきて清きこゝろも
昔の罪の今に殘るか。
枝のいづくに罪やとまれる。
昔の戀の今に迷ふか。
色のいづくに戀やまよへる。
八重に、七重に花は咲けども、
實のひとつだに無きぞしるしよ。

そも戀といふ心惡きか。
その戀はこれ花のこゝろや。
その花はこれ戀のすがたや。
吾姿こそ清き戀なれ。
清き戀さへ洗ふむらさめ、
心さへ無き蝶は散らずや。

松見ぐさ

心は蝶さへ花に寄せて、
落つるもいとはず園に迷ふ。
われこそ中にも弱きかぎり、
松か枝からねば立ちもえせず。
末の子なればや、夏に入れど、
白きもいつしか波と散りて、

影さへ消ゆれば魚の泡か。
むらさきさめては鳩と飛ばん。
暫く殘るもなさけならず。
葉守の姫には濃きを好み、
汀を染むればよろづ綠。
日かげも洩れねば獨ゐをる。
行きたやもろとも姉につれて、
松より昇らん雲の上に。
夕ばえむらさき山を染めつ、
われはたむらさき雲を染めん。
春戀ふものにも影となりて、
老たる鶯やどり貸さん。
心は空ぞや、身のみ中に

まよふを晴らせや、つゆぞ迫る。

みやびを

美しや、美しや、
右も、左も、花と、花、
梅に、柳に、桃、櫻、
藤、山吹に、連翹や、
一足づゝにすみれぐさ、
菜の花のひなびたる、
木蓮のさとりがほ、
金盞に過こせかし。
小てまりに、つゞみぐさ、
雲雀の舞のはやしせん。
れんげ草は誰がゐとね、

瑞香のときめきて
躑躅燃ゆるは何思ふ。
いづれ白きぞ梨、　すもゝ、
海棠こそなさけ知れ。
つら〳〵つばき先落ちん。
つまばや、いづれ、これやよき。
折らばや、いづれ、かれやよき、
これや、
かれや、
いづれ、
いづれ。

花柳合唱

折らんとは、

つまんとは、
つれなやな、
こゝろなや。
花には花のおもひあり。
柳は柳のなさけあり。
其君は人ならず、
人こそ人を思へかし。
花つみてうれしきか、
柳手折りて移すとも、
夜半の涙は苦しきに、
缺けし姿をめでんとや。
人は風よりこゝろなし。
姫君よ、姫君よ、

救ひたまへや、折られなん、
助けたまへや、つまれなん。

佐保姫

あはれやな、いかにせん、
人の爲には染めねど、
人見るもいとはず、
人折るを許さず。
許さねど折らんとや、
霞にやつゝまん。
うすぎぬの隱さじ。
志良姫の霧借らばや。
八十蔭に解けしか。
そよや、たをやめの花を染めて、

みやびをの心移さん。

たをやめ

梅のかをりを身にとめて、
柳の枝に袖ふれば、
桃の色染むもすそより、
櫻かざしてかんばせも
春をあらはす吾心
知るや、知らずや、山吹も、
藤の陰さへいと淺き
水に寫せば椿寄り、
襟を飾るか海棠の
睡催ほす春の風。
雨となるともよしやよし、

月は晴れてもおぼろぞや。
何を思ふぞ雲井にも
閨の怨はありや否。
星はいづれも同じきに、
なれと相合ふものや無き。
我もさびしき花の中、
花と語れど言葉さへ
通すものなき園の戸や、
なれは洩れても物いはず、
琴にもらせばそれも泣く、
怨は何の怨ぞや。
花の心か、吾こゝろ、
心こたへん人もがな。

みやびを　花よりも
こは美しや、花を集めし姿かな。
櫻の色に、梅香ひ、
柳さきたる枝振や、
桃のなさけに、山吹の
清きこゝろはありや否。

たをやめ
清きこゝろを知る人に
あつきなさけをさゝげばや。

みやびを
あつきなさけは我もまた
清きこゝろにそゝがばや。

たをやめ
さては花より、色も香も、
みやびを
我ぞ知るなる、君ならで、
たをやめ
誰にか見せん吾こゝろ、
合唱
いでや互に語らばや。
佐保姫
をかしやな、をかしやな、
花捨てゝ、花に入る、
男心も春ぞかし。
をとめごゝろも春ぞかし。

花のこゝろも春ぞかし。
春の心は吾心、
吾心こそいつくしめ。
花と花、人と人、
いつくしめ、春なれや、
春なれや、いつくしめ。
花柳合唱
春なれや、いつくしめ、
花と花、いつくしめ。
男女合唱
春なれや、いつくしめ、
人と人、いつくしめ。
一同合唱

いつくしめ、春なれや、
人と人、花と花、
春なれや、いつくしめ、
人と花、花と蝶、
いつくしめ、春なれや、
蝶と鳥、鳥と花、
春なれや、いつくしめ、
花と月、月と人、
いつくしめ、いつくしめ、
春なれや、春なれや。

桔梗原

あかつき鹽尻の里を出づれば、
霜に入る古道一すぢ白し。
霧も尙迷ふ桔梗が原、
山のみ稍さめて花の色あり。

風はいづくよりぞ面劈き、
駒もなやめるか遠くいなゝく。
つまづけば立つは鳴か、鶉か、
見かへれど影無し、我ぞひとり。

傳へ聞くむかしいくさありしと。
勝ちたるは何者、敗れしは誰そ。
問はんにも人無し、知るも甲斐無し。

勝ちたるも骨ぞや、敗れしも骨。

骨あれば戰ふ、戰へば骨。
亡き魂はいづくぞ、それも戰ふ。
戰は玆も、山も、都も
戰うて進むか、何か安き。

あめつちはあはれ殺氣滿ちたり。
木の葉さへ血に染む霜の鋭さ。
霧も晴れ行けば鷲のあざるよ、
草に臥す小鳥か、人のかばねか。

見渡せば山々いよゝ迫りつ、

うまやあるもさびて煙寒し。
漸に日かげ石を磨けど、
馬を洗ふ泉落葉洗はず。

飛雲辭

秋深けぬ、秋深けぬ、
　木曾の山路は秋深けぬ。
天にひめたる筆盜み、
　二十一里をゑどらん。

霜ふれや、雪まけや、
御嶽の頭先染めて、
常世がほなるよそほひに、

駒草殘せ裾摸様、
墨は落ちてもおのづから
深山烏と袖めぐる
三むれの山は色まじへ、
まだらに鹿の子着せばやな。
山吹山は神の子の
思黄ばみて落つるかや。
落ちて流れず、尙めぐる
巴が淵の深緑、
鳥居峙のくれなゐは
立田姫の臥戸ぞや。
臥戸設けて尙來ずば、
駒が嶽の神馬驅り、

錦のしとね踏み行かん。
馬籠峠に隱るゝか、
あげろの山の姥いかに、
問へど答へぬ山めぐり、
めぐり、めぐるや、かけはしを
いで斧振りて碎かなん。
小野の瀧などふるふ、
そも天の河落とさばや。
ねざめの床にやすらへば、
龍姫の使など遲き。
山に飽かねど、わたつみの
底の色にも染まりたや。
先烏帽子岩いたゞきて、

象岩にまたがり、
大釜に、小釜に、
白き石煮て待たん。
水の面など白き、
楓ちぎりて朱を打たん。
打てども解けず、尙白き
水は誰のたくみぞや。
二打て、三打て、
四、五、七、千よろづの
山の木の葉皆打てや。
飛ぶよ、飛ぶよ、くれなゐの
雪は山より空に飛び、
羽は空より溪に散り、

桂男妬む山姫が
うはなりうちか、天地の
いさかひ解けぬ秋風や。
はては分れて、また笑ふ、
山紅に、水白き、
二十一里のをかしさや。

秋深けぬ、秋深けぬ、
木曾のうまやは秋深けぬ、
人の忘れし笛取りて、
二十一里に吹かばや。
風も吹く、雨も鳴る、
板屋の石も鳴るやらん、

霰洩りても、月たまる
苔は幾代のかたみぞや、
軒のゑのぶも日に焦がれ、
思盡きても身を晒す
下に白けし家の名の
文字も塵にや磨られけん。
籠の檀鳥習ひ讀む
經はあるじか、巡禮か、
厨黑みしはたごやの
奥に煙も打ちしめる
中に燕も宿らずや。
雞は泊らぬ時知らせ、
店にひさげる小鳥さへ、

いつの春にか打たれけん。
花は漬けても色さめて、
けづる甲斐無きお六櫛。
姉も、妹も馬追ふは、
けふもいくたび阪越えて、
落葉かざしつ、歌うたふ、
馴れし山路もさびしきか。
弟に語るな駒王の
跡に花つむ白露は
巴、山吹、夢に泣く
夜半の涙とよも知らじ。
鄙のつらさを引けばとて、
乘るも都の「わ」び人や。

あらべ合はせよ、兼平の
謠うたふも聲さびて、
何に痩せけん、名も知れぬ
うき身風刺す薄衣。
吹けや、吹けや、夜も深けつ、
蔦の木蔭に笛吹けば、
またも時雨の忍び音に、
獨泣くらん旅の子や。
溪のあなたに笛吹けば、
けふもねざめのをとゞひの
涙憚るともしびに、
砧かへせば我も泣く、
人わびつ、里荒れつ、

二十一里のさびしさや。

秋深けぬ、秋深けぬ、
木曾の山路は秋深けぬ、
木曾のうまやは秋深けぬ。
天くれなゐに、人さびつ、
二十一里のをかしさや、
二十一里のあはれさや。

醍醐賦

日は解けぬ。
くれなゐの雲は灰となり、

むらさき重き山々は
夕の秋に沈むらん、
山門の内、影落ちて、
千年の杉先夢み、
木の間に餘す一點の
光は何のまぼろしぞ。
鐘樓の下に我立てば、
頭上に起る天風に
聲打添ゆる小笹原、
秘密の經や唱ふらん。
三寶と呼ぶ鳥なきか。

醍醐の水はいづくぞ。

醍醐の水はいづくぞや。
落葉叩けど露あらず、
永劫の地も死は食みて、
死より生まるゝ鬼も無く、
佛鎖すか金堂の
扉叩けば塵の香や、
神女塔にも降らぬか、
星は飛べども地に落ちず、
龍の影だに過ぎよかし。
雲怒るとも厭はねば、
空のあなたを探らばや。

醍醐の水はいづくぞ。

醍醐の水はいづくぞや。
花見の山ぞあなたなる。
花見の人はいかにぞや。
花見の春は回らずや。
我は常世に遊ぶ身の、
時の隔てをいざ除けん。
花見の幕を描きては、
途を挾みし屏風こそ
夜の幕にも代へよかし。
花を護りし鈴や無き。
花をついばむ鳥逐うて、
花」と競ひし人呼べや。
醍醐の春はいづくぞ、

美しき人はいづくぞ。

美しき人はいづくぞや。
星見えつ、月見えつ、
星を染むれば、花咲きつ、
月をゑどれば、人笑みつ、
くれなゐの袖匂ひ、
むらさきの裾おぼろ、
雲も五色の幕わけて、
一の君は政所、
西の丸、松の丸、
三の丸も後れず、
加賀殿と手を引きて、

東の方も出でたり。
局々も皆出でゝ、
籠もる姿花を縫ひ、
積もる思春を吹き、
花は一重、七重、八重、
花色々の花添ゆる
醍醐の春ぞ美しき、
美しき人にすゝめん、
美しき酒はいづくぞ

美しき酒はいづくぞや
美しき人春を酌む
江川酒は博多より、

菊の酒は加賀より、
僧坊酒は奈良よりか。
伊丹、尾の道の酒いづれぞや。
盃に花浮けて、
共に吸へば、満ち渡る
花か、酒か、人の香か。
誰も過ごせや、春ぞかし。
顔は燃ゆとも、花も燃ゆ、
花と醉はずば、花忌まん。
醉うて渇かば、いざ茲に
花の日かげを稍避けて、
松の緑の露染むる、
茅屋は誰の好ぞや。

王義之の筆、貫之の
歌も花や詠じけん。
木の下風に稍動く、
烟も花や香ふらん。
器は高麗の宮に獲し、
壺も呂宋の貢なる、
獅子の香爐、猿の釜、
ひさごの銘は大吉や、
箱の蒔繪も大文字や。
三の寶ばかりかは
よろづの寶皆寄せつ、
よろづの骨を枯らしける
さまをあやつる人形の

聲は誰を學ぶらん。
太閤殿はいづくぞ。
太閤殿はいづくぞや。
髯は添へても、つやもなき
髮にこがねの冠や。
眉はつくれど、色黑き
額に染みし汝風は
錦の袖に入るやらん。
くめども醉はぬ菊の酒、
大明の酒まだ來ずや。
秋津島の酒皆吸ひつ、
花のかんばせ皆寄せつ、

聚樂と呼べど尙足らぬ
醍醐の春のさびしさよ。
萬里の城を幕として、
大明の花見せよ。
牡丹と櫻いづれぞや。
花のいくさに誰か勝つ
葡萄の酒に船浮べ、
玉の盃散らせよや。
大明の春はいづくぞ、
萬里の果はいづくぞ。

萬里の果はいづくぞや。
三千の世を握りなば、

地獄を誰に與ふべき。
曾呂利は何を笑ふぞや。
なれに貴妃を與へても、
尙極樂を望むかや。
極樂は人の世に
活きて甲斐ある心ぞや。
八郎の矢は鋭きも、
僅に落とす龍の珠、
九郎は躍る海原の
あなた占めしはそらごとや。
兄は動かぬ富士がねの
裾野の獵の小さよ。
日かげ留めても波に入る

一族留めぬ淨海に、
王と呼ばれて膝を折る
恭獻の骨や無き。
「世の中にちと我に似た人もがな
活きて甲斐無き事を」とは！

活きて甲斐ある者はいづくぞや。
花散るか、人散るか、
一ひら散れば、春も散る。
十ひら、百ひら、千よろづの
人も、家も、國も、皆散るか。
大明の酒遂に來ず、
萬里の果に吹き渡る

世の秋風ぞ骨に沁む。
秋風を拂へよや。
秋風は吹けばとて、
一たび春を咲かせつる
木の實は人に拾はせや。
冬は枯るともまた返る
春は此世の心ぞや。
此世の心占めなば
常代の思占めなん。
何か泣く、何か泣く。
美しき人また泣くか。
つはものどもゝ何か泣く。
利休も泣くか、山樂も、

曾呂利も泣いて笑ふかや。
江戸の亞相ぞ獨笑む。
笑へよや、笑へよや、
昔思うて笑へよや、
今を思うて笑へよや。
翌を思うて笑へよや。
泣けばいよ〳〵美しき
花の涙ぞをかしやな。
涙玉なす花衣
僧に著せなばをかしやな。
墨の衣をなれまとひ、
夢を說くもをかしやな。
をかしやな、をかしやな、

なもをかし、
我もをかし、
賤の伏屋に生まれ出で、
よろづのいくさ中過ぎて、
こがねの殿に昇りては
那落の底に落ちにけん。
地獄の王の冠剝ぎ、
鬼、獄卒を叱咤して、
天上の宮襲へよや。
諸天諸魔の王となれ。
百萬億のきざはしに、
百萬億のたかどのや。
百萬億の寶網に、
百萬億の寶帳や、

華帳、香帳、鈴帳に、
栴檀の帳、瑠璃の帳、
こがねに垂るゝはなかづら、
錦に垂るゝ瓔珞に、
香ふは塗香、薫香か、
沈水の香、最勝香、
香焔めぐる日月の
光明の雲、樂の雲、
香樹の雲に、樓閣の
雲に雲卷く花の雲、
天上の花見せよ、
天人の舞眺めなん。
鬼も舞へ、夜叉も舞へ、

魔は天螺吹け、天鼓打て、
菩薩の笛に聲合はせ、
我も如意樂かなでばや。
あはれ吾手清めんに、
醍醐の水はいづくぞ。

花賣

一

けさはうれしや鷄より先に、
里を出て行きや雲雀もまだか。
山は朝霧、日はやう〳〵と
載せた重荷の露照らす。

重荷載せても花ならよかろ、
花のかんざし、小露の玉や。
蝶もうか〳〵町まで來れば、
京の娘はまだ醒めぬ。

花は入らぬか、入らぬか桃は。
雛の節句もあしたか、けふか。
わしは御殿もほしうはないが、
人形一は抱きたい。

京の娘は友禪重ね、
花見、遊山と化粧に暮らす、

わしは花賣り山家に暮らす、
せめて土産に紅ほしや。

紅もつけぬがわしには似合ふ。
賣れぬ花でもあたまへ載せて、
山へ歸るを呼ぶのは花か。
花も、姿も寫すとは。

姿はづかし紺地の木綿、
帶も淺黄や、赤いは襷、
白い脚半につかぬか塵は、
吹くも春風二里の路。

二

けさはうれしや鶯鳴て、
里を出て行きや燕もかける。
吉田通れば降る春雨に、
載せた重荷の花濡らす。

花は濡れても此身は濡れぬ、
梅の花笠、柳の簑や。
蝶を入れても浮名は立たぬ、
京の娘は何こわい。

花は入らぬか、入らぬか櫻。
嵯峨の櫻も雨にはなやむ。
花の心はわしこそ語ろ、

心聞きたきや一枝を。

花のたよりか、またわしの身か。
雨の姿は尙はづかしや。
畫にもかくなら花だけ寫し、
わしは手拭顔隱す。

隱す手拭吹く春風の、
憎くや畫筆にゑくぼもかいて、
頰に紅さし花、紫の
濡れた姿は誰が姿。

をかし、美くしゃ。畫姿出來た。

わしの顔より書姿かはい。
わしもかはいとなぶるは厭ぢや。
わしは山路のすみれぐさ。

三

けさはかなしや人より遲う、
里を出て行きゃ鳴くほとゝぎす。
春は過ぎたか、かたみの色香
載せた重荷は尙重い。

載せた重荷に此身も痩せて、
姉に問はれて花よと云へば、
花のしづくか、涙の露か。
京の娘に何習た。

花は入らぬか、入らぬか姿。
花の書姿よろづの人に
見られ、ほめられ、もてはやされて、
わしの姿は誰も見ぬ。

さまは今頃何寫してぞ。
御所の姫君、祇園の舞子、
長い振袖、友禪重ね、
花見、遊山に行く所。

長い振袖一しほかはい、
花見姿は賣るよりよかろ。

わしは手拭顔隠しても、
花のしづくの口濡らす。

花のしづくか、涙の露か、
京の娘に何習はねど、
花の書姿、心も取られ、
花も入らぬよ、身も入らぬ。

妻あらそひ

秋山の下氷男

いづしをとめよ、聞き給へ、
いましを見しは夏山の

雲の司も日に醉ひて、
頽れかゝれる時なりき。
緑息つく谷の戸に
何をさゝやくいさら川、
水の秘言聞かばやと、
ゑげみ分くれば、あな妍(にえ)や、
玉の花びら集めては、
妙の衣練る白蓮か。
それの香よりは微なる
息に常世の命洩れ、
頬をついばむ月草に
笑むはいかなる夢や見て、
爪に紅さす撫子の

泣くに、いつまで醒めざらん
あゝとかこてば、翠鳥の
瑠璃を流して行く影に、
半開きてゆふづゝの
光り、また止むまなざしや、
止みて、また照るおもかげは、
殘る日かげか、吾影か。
あはれゑろかね消えにけり。
我は綠に顫ひけり。

春山の霞男

いづしをとめよ、聞き給へ、
いましを見しは冬山の
雪のしら姫胸解けて、

歳を通せし時なりき。
空も淺黄に笑みそめて、
海を挑めば波も笑む。
岩の細螺拾はんと、
汀たどれば、あな妍や。
神の御門もけふ明けて、
八の衢にかよふらん。
境知られぬ味御路、
無間勝間の舟浮けて、
香木棹さす波の穂に、
己が胸見る白鳥か。
それの羽より滑の
身には情の滿潮や。

鶴の尾よりも長く引く
髪の幾筋そよ風に、
口をさそひて歌となる
聲は月かげ彈くやらん。
我も合はせばほゝゑみて、
瞼はぢらふ紅は
東御空の夕映や。
我は紫溶けにけり。

秋山の下氷男

いづしをとめよ、聞き給へ、
いまし見てより風となり、
萩に計れば露と云ふ、
身はうきものと知りにけり

星の通ひ路眺めては、
虫の草笛吹けばとて、
ゑらべ合はさぬかりがねは
それて狹霧にまぎれ入り、
月もなやむか青摺の
衣かつきて、ものおもふ。
八十の神さへかなはぬか。
弟しかなはゞ菊の酒
身高量りて甕にかみ、
甘菜、辛菜も、廣ものも、
鰭の狹ものも、興津藻も、
もみぢ飾りてつぐのはん。
それも氷雨となりけるか。

戀は色ある涙かな。

春山の霞男

いづしをとめよ、見給へや、
いまし見てより絲遊の
野邊を迷へば草も笑む、
身のうれしさを知りにけり。
花の色糸撰びては、
迦爾波櫻を衣に織り、
玉の柳を袴とし、
沓は山吹、襪は
緋桃幾重に縫ひ合はせ、
心射ばやと、弓矢まで
添へて掛くれば紫や、

中もにほへる文垣に
立てば、先立つ胸の波、
いましの胸に通ひては、
夢もおぼろの月落ちて、
花の衣に醒めよかし。
それも藤とぞなりけるよ。
戀は命のかざしかな。

秋山の下氷男

霞をとこの妬ましや、
藤にいろどる戀衣、
いづしをとめの目を奪ひ、
裾のおぼろにまぎれては、
閨に從ふ春の蝶、

いづしをとめの夢亂し、
戀のひめ矢に雉子より
ゐにし射たるぞ妬ましき。
吹けや、吹けや、夜嵐に
花の衣吹き破れ。
柳の袴吹き亂せ。
藤の糸房吹き切れや。
戀の弓矢吹き折れや。
閨の霞吹き散らせ。
戀は花にかなふとも、
幸は短き花の夢、
罪はをろちと身をまとひ、
果は黄泉路に落ちよかし。

春山の霞男

下氷をとこのおそろしや、
おのがかなはぬ戀風に、
他の重ねし花衣
裏をかへしてつくのはず、
戀のたくみは神ならひ、
結ぶ誠に免されん。
契たがふは青人の
草の習か、淺ましや。
助け給へや御祖君、
伊豆志河の竹編みて、
荒籠に石と鹽とあへ、
竹の青葉に包めよや。

竹の青葉の青む如、
鹽の流の盈つる如、
石の汚の解くる如、
解けよ、盈てよ、青めよや。
釜の烟に花蒸して、
ゑばし小春と笑めよかし。

秋山の下氷男

いづしをとめはいづくぞや、
釜の烟にいとゞ尙
菊の齡も縮みけり。
もみぢの榮もちりにけり。
ゑぐれすゝれど骨冷へて、
尾花枯れ臥す霜の床。

色を思へば雪となり、
花にこゞへて千鳥泣く
うきは此世の定かや。
定常世の紲かや。
定糸くる御祖こそ
情知らぬか、恨めしや。
あはれ黄泉比良阪や。
苔も氷れる千引石
裂けて斜に闇に入り、
底は千ひろか霧こめて、
淵に知られぬ渦鳴るは、
あはれ八のいかづちか。
骨に水さす魚の香を

吹きて寄り來る影の身は
波に髪解く枯柳、
あはれ泉津醜女かや、
あはれ淵に引かれ行く、
あはれ、あはれ、闇に入る！

春山の霞男

いづしをとめよいかにぞや、
藤の衣の身を染めて、
いましも藤となりにけり、
我は綠となりにけり。
色を合せば紅の
實は常夏となりにけり。
戀は天の詔琴か。

調常世を和ぐる
戀の曲編む御祖こそ
情餘れる尊とさや。
あはれ虹の橋浮きぬ。
錦組みたるおばしまに
こがねこぼして朝ひこの
宮を出て來る跡に引く
音も調ふ長橋は
それも六の緒張るやらん。
桂かざして神集、
星の花蒔く戯も
露とちりては珠と凝る、
砂子霊きせぬ銀の河

原を縫ひゆく羽衣は
そよや天の使かや。
そよや花の衣更へ、
共に、共に、御空まで！

晝の夢

薔薇はなさく陰に臥して、
詩を枕に仰ぎ見れば、
詩の心は花に入りて、
笑むよ花びら、笑むよ、笑むよ、
笑みて、笑みて、詩となるよ。

薔薇ほゝゑむ陰に臥して、
詩を懷きて睡り見れば、
花の姿は夢に入りて、
舞ふよをとめの、舞ふよ、舞ふよ、
舞ひて、舞ひて、戀となるよ。

をとめ舞ひ舞ふ袖にふれて、
戀を歌ひつ我も舞へば、
夢の心は姿ぬけて、
散るよもろとも、散るよ、散るよ、
散りて、散りて、花となるよ。

水蓮の一ひら

紫の一ひら、
　誰か書く戀の字。
白妙の一ひら、
　我書きぬ死の字を。
夜嵐は吹きたり、
　殘れるは一ひら。
白妙は皆散り、
　戀の字の一ひら。

弘田龍太郎作曲

芭蕉の葉

詩興起るに任せて、
一筆墨を含ませ、
芭蕉のそり葉寄すれば、
　あはれ風に裂けたり。

きのふの一句變へんと、
細筆朱に染めつゝ、
芭蕉の破葉探れば、
　あはれ雨に消されて。

文字無き書を讀まんと、
薄雲垂るも厭はで、
芭蕉の卷葉開けば、
あはれ月の痕あり。

あはれ露のまろびて。

絃無き琴を聽く中、
玉の響小止むに、
芭蕉の廣葉覗けば、

羅浮仙女の嘆

青邱の君は斬られけり。

禁園の春、夢閉ぢて、
琵琶も洩らさぬ宮人の
かんばせ誰か伺はん。
蘭燈のかげ稍動き、
照るは衣か、水晶の
簾に色そふくれなゐや。
みかどは早く臥しにけん、
鸚鵡も睡るおぼろ夜の
月に心やあこがれし、
花をわけては花に入る
花の香ぞなど高き。
小犬は何を咎むらん。
誰も入られぬ深閨の

中を覗くは君ならず。
小犬は誰に吠えにけん。

青邱の君は斬られけり。
吾園の春、夢過ぎて、
雪のなごりは露となり、
霞は鎖す月の戀。
風はいづくにさそふらん。
我は行かねど香のみ
飛べば、飛び來るうぐひすや。
なれも歌へど心無き
聲は濕ふ雨の糸、
蝶を縫ひてはまた解きて、

水に放てば綾亂す
影は翼か、花びらか。
夕日の光ときめけど、
誰に許さん色も、香も、
なさけも知るも君のみぞ
君は再還らぬか。

青邱の君は斬られけり。
五雲の閣に生まれても、
餘るなさけに落とされて、
世に住めば、身は瘦せつ、
瘦せても歌ふ聲絶えで、
こがね求めず、名も獵らず、

戀もあざらぬ心には
誰の面影刻みけん。
ものに狂ふと人云へば、
獨笑み、ひとりごつ、
心を誰か解くやらん。
詩さへえとかぬ都には
戀に、こがねに、名に競ふ、
塵は立ち舞ふたかどのや。
奥を探るも甲斐無きに、
君何とて覗きけん。

青邱の君は斬られけり。
あはれ散り行く一ひらや、

二、三、四跡追ふは、
吾いのちさへ迫りけん。
水は千里に流るれど、
春老いつ、空さびつ、
霞もむせぶおぼろ夜の
愁を誰か慰めん。
三更の鐘はかなくも
詩をくちずさむ聲消して、
曉の風ひやゝかに
琴の糸切るつれなさよ。
今は殘りて風に病み、
雨になやむも甲斐ぞ無き。
またも散り行く一ひらや、

吾片袖も切られけり。

青邸の君は斬られけり。

吾片袖も切られけり、
涙に朽つる片袖に、
色衰ふる吾肌や。

あはれ夢さへ還らぬを、
夢と近づく影は誰そ。
竹を過ぎては緑泣き、
水を渡れば玉むせび、
月も堪えでや青ざめて、
雲の喪に入る夜の空。
苔の烟の裾まとふ

姿は何の姿ぞや。
君の跡追ふ人やらん。
君の心は獨知る
我の外には無きものを、
あはれ君こそ來ましけれ。

青邸の君は來ましけり。

うれしやな、悲しやな、
塵は君さへ捕へしと
聞けば、妾も斬られしに、
塵を拂うていと清き
君の姿のうれしやな。
君は何とてものいはぬ、

妾の姿變りしか。
變る姿も君の爲、
痩せし身を風殺ぎて、
迫るいのちの悲しやな。
そよや、いのちは君も亦
限りある世を離れしに、
我も離れてもろともに、
君と手を取りさまよはん。
　青邱も亦家ならず。

青邱も亦名にあらず。
今こそ春のなごりぞや。
君の詩を歌はんに、

長笛を吹き給へ。
波立つも、風吹くもよし、世の中は
　龍と虎とに任すべし。
あまつみかどの怒りなば、
玉の宮にも還るまじ。
鶴の翼を借らずとも、
雪と舞ひ行く大空の、
果も無きこそをかしけれ、
限無きこそをかしけれ。
いざや來給へ、蝶も醒む、
紅の光さゝぬまに、
紫の雲に昇らばや、
　しろかねの霧を渡らばや。

總合佛賦

春の日こがねに奈良を描く
夕暮まばゆき東大寺に、
われ盧遮那佛を仰ぎ見れば、
あゝ大なるかな、大なるかな。
三千世界を膝に載せて、
百萬億刧指に拈る、
大悲の眼は玆に開き、
十歳のいとなみ成りし時や。
よろづの法の師寄りつ、寄りつ、
百千の司並び、並び、

神のつかはしめも、
みかども、
青人草もつどひ、つどひ、
白きは其身の影を洗ひ、
黑きは心の炎消して、
赤きは思の夢を燒きて、
紫、迷の烟散らし、
色はさま〳〵染めし衣
光あまねくこがねさせば、
衣色々こがね沁みて、
こがね色々かへす袖に、
こがねの鼓老を打てば、
こがねの笙の音病吹きて、
こがねの笛の音黃泉を離し、

こがねの琴の音苦患拂ひ、
日かげも同じくこがねさせば、
天地あまねくこがね浴びて、
常代もこがねの色に編まれ、
月もしろかね涙照らしぬ。

こがねの色は百代縫ひて、
千歳の半も編まぬ先に、
大悲の眼は茲に閉ぢて、
常代の臺も燒くは誰そや。
よろづのつはもの寄せつ、寄せつ、
よろづの法の師防ぎ、防ぎ、
阿修羅も、夜叉も、乾闥婆も、

牛鬼、馬鬼、おめき、叫び、
いくさの鼓は我慢鳴らし、
鬨の聲は邪欲上げて、
打ち合ふ刃は無慘競ひ、
夜攻の炎は地獄開き、
血に染む扉は朱に燃えて、
烟の廻廊、渦と廻り、
炎嘗め行く柱、棟木、
炎の瑠璃燈、魂と落ちて、
炎の幢幡、鳥と飛びて、
炎の經切、蝶と舞ひて、
炎の花さく大紅蓮。
大焦熱に四天咽び、

こがねの涙に脇士解けて、
あなや佛の膝に這へば、
こがねの龍卷く衣煮えて、
いなづま逆立つ御髪焦がれ、
炎の天蓋、火の光背、
天地あまねく火となりて
常代もくれなゐ熱に溶けつ、
星さへ炎の花を蒔きしよ。

炎は一夜の露に消えて、
またもや營み、またも燒くる、
われ盧遮那佛を下に見れば、
あゝすさまじきかな、すさまじきかな。

常代の影かや顏に落ちて、
光の背も影を返す
日かげは寂しき光射しが、
それさへ夕の帳垂れぬ。
暮れてはしばし無にや入る？
元より無とは誰かいふ？
くれなゐ炎と燃えし光は
こがねの色と照りし光！
像解けなば光磨き、
新の佛建てよ、立てよ。
三千世界を足に踏みて、
兩手も延ばして長く、廣く、
百萬億劫指に彈き、

大悲の眼は更に笑みて、
月日と照りつ、眉もさえつ、
額は圓に天を收め、
頰は潤ふ地ぞ豐、
五岳に秀づる高き意思、
四水に溢るゝ深き情、
衣は霓の糸に織りし
さゝがに姫の妙の技や。
白き慈悲の蓮の紋、
赤き愛の薔薇の模樣、
綠の力松の象、
自由の柳、意氣の竹、
むらさき、くれなゐ、情は縫ひて、

しろかね智慧練る肌を透し、
そびらに溢るゝ春の日かげ、
下にもかげさす秋の月かげ、
血汐かゝらば夏のゆだち、
炎卷きなば氷る雄瀧、
つはもの寄せなば雲の鼓、
鬼神寄せなば花の吹雪、
天地碎けば有無を練りて、
新に作れや神の人を！
人の神を！笑ふ佛を！
總て合はす高き人を！

夜半の水

獨唱

月は落ちる、
　柳もちる。
夢も破る夜風、
　歌も消える流。

うれしと見たは夢か、
かなしと泣くが歌か。
美しい夢は破れて、
泣かれもせぬ世丈うつゝか。

長の夜を獨醒めて、
歌にあかすはかなさ！
短夜を君に逢うて、
夢とも知らぬくやしさ。

才を忌む男心、
戀を忌む世の習。
歌を止めて戀か、
戀を絶つて歌か。

絶たずとも變る男心、
止めたとて泣く歌！
戀こそは歌か、

歌こそは戀か。

歌と戀とひとつと、
思うたは吾夢！
戀と歌と引裂く、
此世こそ誰罪？

歌も今は恨よ、
戀もまた恨か、
戀も歌も知る丈、
恨の恨盡きぬよ。

美しい幻は何やら？

恨も流す死？
死に解ける今こそ、
戀と歌とひとつか、
歌と戀とひとつか——

比良風

夜黑し、風荒し、
渦は卷く鴉の海！
唯ひとつ闇を射るは、
あなたの寺のともしび！

夜毎來る村のをとめ、

舟もなき湖に。
其胸の闇を射るは、
　あなたの戀のともしび！

「陸ゆかば六里、
短夜は明けなん。
水よこぎらば一すぢ、
　あなたの君のともしび！

「夜黑くとも明、
渦は引くとも避けなん。
あなたのともしび射返す
　鏡額に當つれば！

「いかにして來つると
問はれてもかたるまじ、
はづかしの姿は
　君にさへ示さじ！」

衣はちる、髪は舞ふ、
雪崩る膚！
こゝろ一にともしび
　鏡に合はせて泳ぐよ！

波怒る？　風妬む？
夜黑し、鏡射ず。

「あはれ消ゆる、ともしび！」
渦は抱くをとめの屍！

新の思

あらたの思にこゝろ覺めて、
我を立てんと人の世凌げは、
秋のみ迫るよ、あゝとはの秋よ、
吾靈むなしく痛むばかりか、
いたむばかりか、いたむばかりよ。

むごきは定か、苦しきは此身、
定と戰ひ敗るゝ情に

春はいつくぞ、あゝとはの春よ。
吾靈ひそかにもだゆるばかりか、
もだゆるばかりか、もだゆるばかりよ

解けぬ思は夢にならず、
さめし我は月にあかす、
日こそ望まし、あゝとはの日景！
吾靈とはに望むばかりか、
望むばかりか、望むばかりよ。

いのち

逢うたばかりで濟むよな胸か。
とても此世ぢや飽かれぬ思、
花があの世で咲くものならば、
飛んで行きたい、いざ、ほとゝぎす、
それも一聲月より消えて、
先の夢ほど泣きもせず。
エイ、ぢれつたい、さりながら、
これがいのちぢやないかいな。

弘田龍太郎作曲

江口

假の宿は殘つてゐる。誰が惜んだものであらう。心とむなと主人は云うたものを。

其主人は？其客は？朝歸つた平家は？暮に來た源氏は？紅の燈火續いた水樓は？綠の酒の溢れた月見船は？

皆殘つてゐる。

雨は降らぬが君堂に立寄ると、君も、法師も、平家、源家と無常の浮世も、浮世の中の浮世の河竹の樣も心の流に浮んで來る。

心を留める爲か。いや吾心も留めぬのである。それに殘るのは尙惜む心か、尙殘す君の心か、尙宿る歌人の心か、

尙迷ふ浮れ男の心か、美を喜ぶ後の世の心か、破壞しては殘す自然の心か。

自然は最も妖艶な浮れ女か。平家も、源家も、北條も、足利も、豐臣も、德川も悉捉へて皆破壞した。しかもまた愛着の深い女か。一夜の客も跡を留める。跡も無い處も心を留める。心を留めぬ處も跡を殘す。さては天地を破壞しても、また長く殘すであらう。

浮れ女の姿に恐れて逃隱れする生道心は命を知らぬ者！深情の自然の魂を捉へて、恐ろしい破壞の手を、それより熱い愛の手で活かす者こそ眞の情人？

情人の心には儘にならぬ浮世も、無常も、空も春の雨！

情人の心には鞘を當てあふ平家も、源家も、北條も、足利も、豐臣も、德川も秋の雨！

恨も、憎も、怒も、悲も、哀の露に留めて、後の情人の心に殘す君の面影、自然の君の心もこれであらう。

江口の君の心は？

法師より深い情の客の目には斷られぬ一時の宿、しかも何所へ隱れたか、禿より田舍娘が渡しを呼ぶ聲につれて乘ると、象より遲い舟の脚に、秋の日は赤く灰色の雲をいろどるのである。

月の曉

白い月の秋である。

我等は松の木の間をさまよふ。松は春より朧である。影は松より墨畫である。我等は影より夢である。

我等は砂の上を行く。砂は海より鉛である。海は天より空である。島は空より溶けてゐる。松は遠く空を廻つて、砂も亦空に入るか。我等は空より空を行く。

白い曉の秋である。

我等は波打際に立つ。波は空を碎いてゐる。海は砂より鉛である。島は松より朧である。月はもう島に落ちたのか。

我等は天を見上げた。月はまだ中空から稍西にある。

白い月の曉の秋である。

幻住庵

幻の住家か、百五十年の昔、既に屋根洩り、壁落ちた幻住老人の菴は？

幻の住家か、其跡を修復して一夏を過ごした寂莫詩人の菴は？

唯草！唯木！

幻か、日枝の山、比良の高根、唐崎の松、城有り、橋有り、釣垂るゝ舟ありと書いた美景も？

草木は美景まで遮つてゐる。

幻か松の棚、猿の腰掛もと後の峰に登らうとすると、草木は其路も埋めてゐる。

幻か、幻住菴とした額も、木曾の檜笠も、越の菅簑も？

唯草？唯木？

草の中に誌の石が有る、句碑が有る。木の中に椎の木か。有る。草木の中に清水が有る。幻の住家は有るか。

誌は無くとも、碑は無くとも、椎の木は無くとも、清水

は無くとも――幻の住家は無くとも、幻の住家に住んだ人は有る。幻に住んだ人の面影は幻程無くとも、幻の住家とつゞつた文は有る、夏木立の句は有る、猿簑の集は有る。

それも幻か。

主人は餘りに多く寂を愛した。

をかし其寂は有る、主人の居た當時より、多く今有る。主人の心も多く今有るか。幻の住家は幻になつて愈有る、寂の人は寂になつて愈有る。

有るも無いも麓の霧か。否それは餘りに月に見入れて、光を覺えぬ目。幻は消えても現、現は空となつても幻。幻の住家は現の建物、現の建物は崩れても見ゆる幻の住家、幻に住んだ人は現に活きた人、現に活きた人は花を愛し、月を愛し、造化を抱いて夢も枯野の幻に活きた人！

それも幻の思か。

此幻の思は昔の幻の思に通ひ、更に其昔の幻の思に通ふ椎の木を頼む心は、澤を立つ鴫に泣く心。槇の葉に昇る霧を憐む心は、乾坤を水上の萍と悲しむ心。

此心こそ最現、幻に住んで現、幻を作つて益現。

此寂も亦愛、現に泣くも愛、幻を悲しむも愛。

愛はまた寂か、現はまた幻か、幻に住む菴は現に住む心、寂に閉づる心は愛に溢るゝ心で無いかと思ふと、時雨は義仲寺の方も幻にしてゐる。

夏の海

冷な夏の海に入ると、海は溶かす、砂の白も、松の青も、

日の黄も、人の爵位も、財産も、職業も、學識も、藝術も、能力も溶かして水の一色にする。

冷な夏の海に入ると、海は我も溶かす、我と世との葛藤も、吾失敗も、吾苦も、吾悶も、吾悲も、吾怒も、吾恨も溶かして水と一にする。

稍暖い夏の海に浴すると、海は練る、砂を更に白く、松を更に青く、日を更に黄に、人を海水浴衣一にしても、それ丈に貴く、賤しく、美しく、醜く、清く、穢く、色々にする。

愈暖い夏の海に浴すると、海は我も練る、陸の舞臺に悲劇の衣を脱いで來た我を更に水の中の葛藤に入れやうとする、靈肉自在の本體を最高潮に乘せ樣とするか。

我は海を出た。

砂は練絹の樣に白い。松は綠青をつけたまゝの樣に青い。日は須彌壇を明けた樣に黄。寶石をつけたベイルの樣な千網の向を淺黄の海水浴衣來た人が幻の樣に行く。

色の無い波紋が廣がるのは何の雫であらう、透き通つた夏の海に?

佐保村

日は落ちても西の空の美しさ。髪を剃立の若い尼があきらめてゐた戀を問はれた樣な。

東はまだ迷うてゐる現世の兒の夢を洩らす夕煙、其中へ入つて行くと、夢の眞中を斷つ細い流も暗く、較廣い街道の兩側、夢も高低不定の藁屋の上に醒めかけた靈の一片の

様な月が傾いてゐる。

これは愈醒めて行くか、抑々夢と消えて入るか。夢に入つても消えず、醒めても氷らず、醒めて夢を見ると夢も美しい。

昔の恨も、今のわづらひも、後のあこがれも同じ此夕煙、醜い所は消えて、夢ばかり立つのを見ると現も美しい。人の哀も、自分の嘆も、悲も、苦も同じ此西の空、不快な所は消えて、思出ばかり、微な雲を見ると、現も夢もなつかしい。

苦しい思出でも無かつたら、いかに此夕暮が寂し過ぎるであらう。夢も續かなかつたら、いかに此月が冷過ぎるであらう。夢は現の銀の線、思出は靈の紅の絹——あゝ絹を裂く聲は鴈か——それも月より西へ行く。

村を過ぎると、佐保の河原であつた。

春日野

薄暗い冬の日かげに春日野を通る。鹿も通らぬ草村、狐でも招くか、薄は亂れ茂つて野の名を嘲つてゐる。これでは妻と籠もつても、燒くに燒かれぬかも知れぬが、また露も問ふ上臈、籠もるには餘りに凄いであらう。戀の跡は戀よりも亂れて、忍摺の若紫、その色は何所に？　色から色に移る昔男、眞の戀は何？　彼は遂に戀を解したか。戀を解して現の世に得られたか。

「戀も幽冥の界に入らぬと完全にならぬものか。

幽冥の戀は現實の哀、たかも靈はいつまで戀になる。戀

も亦靈の情か。夢と現とを合はせ、空に不空を抱く力の象か。戀も藝術も同じ靈のあこがれかと見ると、堂か、御殿か、一面ばかり殘る粗壁。それも空の齒に嚙まれてぼろぼろになつてゐる。あかしまた蔦が齒の痕を縫うてゐる。

壁は遂に崩れるか。蔦は能く繫ぎ止めるか。

蔦は永久の情の樣に深紅である。

あかしまた餘り紅で、血の樣である。

龍安寺

花も紅葉も無い冬枯の京、龍安寺へは昔鴛鴦が集まつた。京の冬の花見と、鴛鴦の樣な人も見に行つた、鴛の思を抱く人も見に行つた。池のまはりに木枯を防ぐ土佐の畫屏

風も立てたであらう。匹田の小袖幕も張つたであらう。其陰には金蒔繪の辨當も開いたであらう。朱の小盃も飛ばしたであらう。銀砂子の短冊も散らしたであらう。鳴かぬ鳥をそゝのかして一節切も吹いたであらう。附かず離れず琴三味線も彈いたであらう。聞けよがしに投節も歌うたであらう。倒れた樽を人形に舞はしたであらう。水に落ちぬほど亂舞も舞うたであらう。遂に短かい冬の日かげに促がされて、鳥に若かぬ恨を殘して歸つたであらう。

今は如何であらうか、鴛鴦の樣な人まで昔より多く出て遊ぶ世には、鴛鴦も殖えたかと、稍高くなる路を上つて門を入ると、松である、風である、寺は中門を閉ぢてある。振りかへると右に御室、双が岡、花園から朱雀野あたり、野は廣く見えるが、花も、紅葉もない冬枯。

ぢかし池はと見ると、一羽の影もない。
ぢかし人はと見ると、誰も出て來ぬ。
自分は枯れた草の上に坐つて、更に見まはした。
木枯は野をしごいて、水の面まで縮める。
やう〳〵人の足音がした。鴛鴦の樣な人ではないかと見ると、亡くなつた人を送る一行であつた。此向に火葬場が出來たのである。
花も紅葉もない冬枯の京龍安寺へは今葬送の駕が集まる。

命の花園

落葉――落葉――落葉――
櫻も落ちた、柳も落ちた、銀杏も落ちた、山茶花も落ち

た、木槿も落ちた、希望も落ちた、意氣も落ちた、精力も落ちた、藝術も落ちた、戀も亦落ちたか。
けふも風！春には紅の生を吹いた風、けふは黃の衰を吹く。
紅葉は戀の燒殼の樣に路傍に堅まつてゐる。
皆灰か。
あゝ燒けて尙茜の躑躅、これは何であらう。これも亦灰になるか。
黃落を刺戟して鵙が橫ぎる。
また落葉を見ると、それも濃淡がある。自然に配合して一色の花より美しい。
また梢を見ると、それも精粗がある、二片三片すがりついたのは常盤木より更に美しい。

あゝ入日！ 黄は活きる、茜は笑ふ。木の胸も見えすく。

一聲は木の根からか、葉の裏からか、茂に秘密の思を抱く鶯の溜息か。

池へ下ると藻は落葉より落ちついてゐる。河骨は風を吸うてゐる。石を落としても魚も騒がぬ。水は藍を湛へてゐる。

命——命——命——

春には紅の生を吹いた風けふは黄の命を吹く、茜の命を吹く、藍の命を吹く。

蟲聽

萩？ 桔梗？ 女郎花？ 雪洞は微に色も無差別！ 松

蟲？ 鈴蟲？ 蟋蟀？ 轡蟲は我はがほに他を消さうとする！ 女郎花の側に立つのは歌麿の筆か、春信の筆か、桔梗を裾模様にするのは清長の筆か、豐國の筆か、萩に隱れるのは師宣の筆か。

松蟲を聽いて芳年の筆と柳北は醉をさましたであらう。鈴蟲を聽いて抱一は菊塢の一椀を味はうたであらう。蟋蟀を蜀山人は何と聽いた？ 南郭は？ 其角は？ ばせをは？ 宗祇は？ 西行は？ 業平は？

轡蟲は平安朝の時も、鎌倉の時も、東山の時も、江戸の時も、明治の時も同じ樣に鳴く。

をかし人は時につれて哀と聽く、寂と聽く、風雅と聽く、意氣と聽く、をかしと聽く、美と聽く。

蟲は人を何と聽くか——蟲は人に聽かず、蟲は唯蟲を聽

く！ 蟲の歌は永久に唯一？

女郎花は知るか、桔梗は知るか、萩は知るか。

いや花よりも、むかしの人よりも解くのは永久の女性であらう！

夕映

春の日は入る鳩羽の雲に！ 鳩羽の雲は吐く春の富士を！

鳩羽は灰になる――富士も灰か――あゝ紅――紅は透いて、透いて其靈も見える！

永久の男性と屹立した山にも思の外女性があつた！ 女性の中の男性、男性の中の女性、それが山の靈か、宇宙の靈か――相映する人間の靈か。

あゝそれも一瞬？

玄かし一瞬の紅は灰の雲其儘に永久の愛の被衣とするのである。

公園の夜の曲

淺い春の公園の夜の曲よ。星より白いのは梅の聲か。灯より赤いのは椿の聲か。黄色なのは連翹の聲か。小松の茂の向、銀の霧は被衣きる姫の合唱？ 夢を吹く噴水は誰の獨吟？ 稍低い徑の常盤木の溜息！ 較濕る並木の柳の髪のさゝやき！ 薔薇が悶えるのは待遠い生の爲か、去年の儘の死の爲か。ダーリヤが泣くのは無常の悲の爲か、永久の喜の爲か。白鳥が胸を縮められてうめくのは鞦韆の軋る

のであつた。孔雀の羽と開くのは何の靈？　それも闇！
靜寂は餘韻を引いて、どこまでふるふのであらう。
深い春の靈の園の夜の曲よ。

停車場

黑い息を吐く獸の機關車！　檻の客車！　命令がほの鈴、
汽笛！　唯殘る煙！
行くよ、來るよ、唯一片の切符――それに覇氣を通して
來る！　恨を切つて行く！　欲を握つて來る！　損を拋つ
て行く！　名を求めて來る！　失望を受けて行く！　戀を
望んで來る！　涙を送つて行く！　三尺の出入口に一切を
集めて、幾分に悲喜を縮める！　見送るも幾分？　見返る

も幾分？　唯殘る煙！
去かし其黑い中に白い悲がある、青い恨がある　赤い
怒がある！　紫の愛がある！
停車場の色の美しさ！

春の月

逢ふばかり、戀の願かな、そりや初心ぞえ。逢うて別るゝ身の秋よりも、逢はで死ぬこそ戀の奥。エヽさりとてはまた、生きて此世の春の月。

寒牡丹

戀の炎の燃立つあとゝ、見れはそのまゝくづれもせぬは、何で活きると心を問へば、根より紫しめらす涙、それも美くし枯れても死なぬ、いのち嬉しい寒牡丹。

慧春の火定

慧春は相模鎌谷の藤原氏の娘と生まれた美人である。しかも空しく三十を過ぎて、兄の了菴慧明の最乘寺を叩き、度を求めた。其理由は「俗に處する意無し」としてある。兄が時の名僧になる位、宗教的傾向は遺傳にか、周圍にか、幾分かあつたかも知れぬが、女性で、美貌で、其本能も、特色も捨てやうとしたには、秘密の心理があつたであらう。兄も流石に許さなかつた、「出家は大丈夫の事ぢや、女子供に立てられるものか」

彼は暫默つてゐた。

忽火鉢に赤くなつてゐた火箸を取つて其美顔に當てた。

了菴も負けて其美髪に剃刀を當てた。

しかし髪は無くなつても美はあつた、疵はついても色はあつた。彼の理智は舌を砥いで向ふ者を破つたが、他の情は文字と凝つて衣の袖に投入れた同宿があつた。或日了菴上堂して一山の大衆淵の樣に謹聽する。慧春忽立上つた、衣を脱いだ、一糸もつけず、彼文の主を呼んで、「さあ！」

大衆の顔！　師の顔！　かの僧は飛上つて、裏の山へ逃込んだ。

彼は攝取菴を山下に立てゝ往來の衆人を接待した。

一日最乘寺の山門の前の盤石の上に薪を積んだ。彼自其上に坐つた。彼自火をつけた。
兄は來て「熱いか、熱いか」
「熱いか冷たいか生道心に分ら……」
あとは火。
一詩を作つて其苦惱を代表してやるのは、空しくなつた美にも亦生を與へる藝術の情である。

水も空し。土も空し。
木も空し、草も空し。
花も空し、鳥も空し。
魚も空し、蟲も空し。
獸も空し、人も空し。
雲も空し、月も空し。
日も空し、空も空し。
佛も空し？法も空し？
我も空し？

我を生みし人はいづく？
我は元生まれもせず。
我と遊びし人いづく？
我はいつも獨！
我を戀ひし人いづく？
彼も亦空し！
空しく我を戀ひて、
空しき思寄せしが、
一切空しと說くむしろに、
空しき頭寄る中、
空しき衣脫ぎ捨て、
「是什麼」と招けば、

總身耻に燒けて、
逃げて林に隱れつ！
戀とはそもそれか。
耻にだに若かず！
耻は戀よりつらき？
戀は死より易き？
戀も亦空し？
死も亦空し？
空しからぬは無きか？
空しきあとより湧くは？
水は水を追ふ！
花は花に積もる！
月は缺けて滿つる！

日は落ちて出づる！
空は空しくて蒼し！
我は空しくて我？
我は尙我か？
其我を捨てつ！
尙湧くは何？
身は早く捨てつ！
身の外の心？
其心捨てつ？
心の外に何？
其何を燒けや！
燒けて尙殘る
物有りや、はた無しや、

有無も無きさびしさ！
其寂を燒けや。
いざ放て火！
あゝ立つや炎！
木燃ゆる！　草燃ゆる！
花燃ゆる！　土燃ゆる！
雲燃ゆる！　風燃ゆる！
月燃ゆる！　日燃ゆる！
父燃ゆる！　母燃ゆる！
同胞燃ゆる！　友燃ゆる！
戀燃ゆる！　佛燃ゆる！
身燃ゆる！　心燃ゆる！
生燃ゆる！　死燃ゆる！

我燃ゆる！　無我燃ゆる！
無燃ゆる!!　有燃ゆる!!!
呵々々々々々々々々々々々々々

童女松原

合唱

松をまはろや磯邊の松を、
波にぬれても枝かはす。

男

村の踊にかこつけて、
忍びあふ夜は月も無い。

女

松の木陰に顔見えず、
男波女波も聲ばかり。

合

松になりたや磯邊の松に、
ぬれて千代まで枝かはす。

男

顔が見えたら人も見る、
いのちかけたる思ぞや。

女

いのちかけてもはづかしい、
むねに女波や男波立つ。

合

松をさがそよ磯邊の松を、

あやし木かげにさゝめごと。

男

歌は、踊は近づくか。
あれ波までもあけかゝる。

女

樣の姿や、吾姿、
いのちくだくる思ぞや。

合

松を切らうか磯邊の松を、
憎やかくした小夜千鳥。

男女

松になりたや磯邊の松に、
千代もこのまゝ枝かはす。

合

松になつたよ磯邊の松に、
あはれ死んでも枝かはす。

弘田龍太郎作曲

流こゝろ

墨田下れば夜風も下る、
星も流るゝ、火影もすべる！
土手の青葉は夢より暗く、
靈と眞白の鳥も無し。

橋を過ぐれば上行く三すぢ、
それも流るゝ、艪の聲きざむ。
河岸の柳は思と沈み、
歌とほのめく影も無し。

流れ、流れて、人の世過ぎて、
海に出づれば、あゝ空までも。
墨も、緑も、ころかね溶けて、
夢も、思も、君も照る！

ダリヤ

誰の心ぞ赤きダリヤ？
　愛と見れば、智慧と黄ばむ！
吾魂か白きダリヤ？
　あらず、黒く凝りし血汐！
あはれ爭ふ秋の風に、
　光り、ゆらぐ秋の夕日！
君も、我も、亂れ、亂れ、
　死ぬよ、生くるよ、ダリヤ、ダリヤ！

弘田龍太郎作曲

短歌

いなづまとあめつちかけて飛び行けば
　千代よろづよも浪にちる見ゆ
筆投げてかの大空を裂きて見ん
　かなたに道はあるかあらぬか
吾ふみは富士に埋めんと思ひしに
　それも違うて琵琶に沈めつ
また降るか花のしづくに筆染めて
　春を悲しむこゝろ寫さん
花ふみし足を洗へば早瀬川
　牛に水かふ童ありけり

里の子に花の有家をたづぬれば
　菫拈りて笑みて答へず
さそはれて水にしたがふ青柳の
　こゝろと見しは燕なりけり
思ふ事扇に書きて行く水に
　投くればもどす夏の夕風
龍釣りて針無き糸をたるゝまに
　眠ればいつか月ぞかゝれる
分行かば世をすて人の骨ふまん
　こゝろして見よ嵯峨の秋草
ながむればこゝふるさとの月なれど
　そこども知らぬ里思ふかな
霜消えて増すとも見えぬ冬河の

日かげを渡るにはたゝきかな

敦盛

先立ちて歸る都は白玉の
　うてなに獨り笛や吹くらん
うた人といはれんよりは吾いのち
　うたとなさばや畫ともならばや
うつゝには我さへ知らぬ吾靈の
　ひめごと夢の洩らしつるかな
さだめより高く雲井に飛ぶ羽は
　夢とうたとに編めどむしるゝ
さと開く孔雀の羽より見る姫の
　顔にかゞやく春の夕日よ
白鳥の翼ひろげて歌かきて

放てばいつか誰か聞くらん

白鷺は月に住みても痩せぬるを

青霧さして更に消えゆく

月やわれ光は足らぬ吾靈の

炎に開く花はいづくに

短句

秋風よいづくより來ていづくまで

鳩飛んで夕日をこぼす銀杏かな

一休の髑髏に酌めやけさの春

太閤の墓より高し奴凧

白梅の夜あけては見るしづくかな

紅梅に尼の姿の寒げなる

朱をすれは易に點うつ櫻かな

合ふといふ春の夢さへおぼろにて

柳さくら内に齒を病む女あり

遣羽子の戀より高き竹の垣

盛遠の昔知りがほに山さくら

京の花見五人男もお茶一

浮瀬の傘落としたり春の雨

海棠の人も眠るか春の雨

かつき着て業平なぶれおぼろ月

花賣のかしらに白しよべの月

たちばなやこぞの扇に何書かん

さみだれや木曾殿此頃色白なり

點滴の數よむほどに夜は明けぬ

梅雨晴や屋根に鷄鳴く水うまや

さみだれの富士をつんざく五郎かな

梅雨晴や十郎の顔など青き

初かつを幡隨院の朝霧かな

蚊を打つて吾血に汚す吾身かな

叡山に白旗立てり初嵐

淵明の酒の薄さよ夜の菊

雁鳴くや蘇武或秋は胡を思ふ

贈りたき人は隱れつ水仙花

初雪や石煮る中へちるもあり

雪の聲氷の聲となる夜かな

蟬丸

獨ひけば一人聞きけり峯の月

兼好

唯ひとつ捨てぬものあり春の月

孤客

秋寒しまたふるさとの文を讀む

絶戀

文噛めば聞くともなしにほとゝぎす

樵夫

花一枝そへてわするゝ重荷かな

道頓堀

芝居はてゝ水に灯見れば釣葱

芳野懷古

骨を埋むる花に花そふ恨かな

東大寺の山門にて

木がらしを引裂て立つ仁王かな

葵祭

馬はねて輿も車も青嵐

寂光院にて

山寺や我足音にさくらちる

清瀧に宿りて

山風や蚊屋に當りて螢落つ

閑居

虫鳴くや木も草も無き庭の雨

矢口にて

童一人載せて漕ぐなり冬の川

龍華寺にて

富士は雪三保は風吹く春の海

舞子濱にて

松や行く白帆やとまる春の風

三千院にて

去ぐるゝやもみぢ卷込む水車

小倉山に西行を想うて

もみぢにも咎はあるかや夜の鹿

祇園

春の夜や花につまづく舞扇

忠盛も口には負けしをけらかな

三本木

風に臥せば月の上行く水も見ゆ

大澤池にて

春風や落花吸ひ合ふ魚の泡

途中

花賣と半里つれだつ春の暮

かげろふやなれも戀知るかすみれ草

すみれ摘めば文かくまでに萎れけり

頭巾二古道に語る小春の日

山ひとつ空に見出だす枯野かな

湖畔行けば霙はいつか雪となり

冬枯や山僧歸る祇園町

尼寺に姫君もありかきつばた

月や雨や山より高き高燈籠

丸づくし一夜は許す踊かな

踊れをどれ世は一まはりづゝ輪を廣く

桃の門白馬繫ぐ御曹司

六波羅の禿とらへん花盛

天龍寺にて

朱の沓片足殘す落花かな

賣茶醉ひ窮樂醒めつ春の雨一日

山吹や筆もうるはしき尼の菴
禁苑の鶴失せにけり春の暮
西行に犬吠ゆる村よ麥の秋
雲の峰簾下して看たりけり
温泉を出て山見渡せば夕立す

灘

酒藏の間々や春の海
金の帆のゆつたり歸る須磨の夏
秋の川暮れて白鳥三二二
マジョリカの皿に花浮かせ春の水
行春を詩集に印す櫻草
新開の土、永刼の空、中に鳴く雲雀
薔薇はら〳〵蜂の女王や昇天す

一口に戀と死を食むいちごかな
曼珠沙華よ死にも花さく地獄にも
紫陽花折てピアノひく手へおくりもの
白百合や戀より長き洗髪
天人も約わすれけん虹の橋も消ゆ
放たれし女また解くダリヤかな
獨唱を鸚鵡覺えつ秋も暮る
秋の雨果無き町の灯も黄に濕り
歌澤の水より淀む木場の秋
コスモスの一片殘る秋の風
温室に花の靈聞けは日も薫る
黄は灰になりゆく年を梅もどき
凩や壁に寫樂のけら〳〵と

花曇り歌麿の女に靈入れん
河岸寒し聲色聞けば故人なり
新内を流させて聞け夜は秋よ
年の市買ふものも無く月斜
渡し場に菊五郎格子秋の水
秋やむかし五色の酒の身に泌まず
夕霧や馬も灯に寄る町はづれ
地も天か羽衣無くば蛇の衣
極樂は地獄の底よ黒牡丹

胡蝶軍

一

海原や、海原や、
　海原の果はいかにぞや。
雲落ちぬ、日も落ちぬ、
天も落ち入る海原の
　果無き果はいかにぞや。
風、長鯨を羽ばたけば、
浪、老龍を鞭うつて、
鱗むしるか散る花と
光り、碎くる水鳥や。

空も血走る夕燒の
果は炎と裂けにけり。
秋津島根も裂けにけり。
花と吉野も散りにけり、
こがねきらめく衣笠に、
しろかねかへす東山、
それも木の芽と煙りけり。
鵜飼の篝闇となり、
天狗ついばむかげろふの
一羽爭ふあはれさよ。
總て占めても尙足らぬ
小野のふすまは寒からん。
夢冷に秋を見る

丘の枕に就かんより、
見よや、あなたは果も無く、
行けば行かるゝわたつみや。
袖を止むる網も無く、
足を遮る繩も無く、
波立てば、船揚がり、
風吹けば、船走り、
月をかざしつ、日を載せつ、
旗は白帆、八幡の
我も菩薩の一人かや。
いで六龍を驅り立てゝ
虎駈ける野に波かけん。
吾狩場こそあなたよ、

吾領地こそあなたよ。

雌波は何を夢むらん。
おもても浮ぶおもかげは
人の姿か、吾影か。
いつしか出づる月かげの
たゆたふ方を見かへれば、
一すぢあるか、無き山の
迷ふは誰のふるさとぞ。
父は吉野に堰れけり、
母は落花を追ひにけり。
獨立ち行くあめつちの
中に家さへ無きものを、

たれ吾爲に思ふらん、
三笠の山に啼くは鹿。
われ誰爲に悲しまん、
鴨の河原も千鳥のみ、
思ひかねたるわきもこも
嵯峨の蟲の音絶えぬらん。
琴のしらべをしるべにて
行きしはかゝる夜なりけり。
かつきほのめく初花に
車やどりの春の風、
香移すや直垂の、
袖は觸れてもむね晴れぬ、
空に息つくおぼろ夜は

あけて歌とぞなりにける。
歌は通へば、歌かへり、
かなふ心に尙違ふ、
上と下との世のへだて。
我も伏屋に生まれねど、
今は日かげに潜む身の、
玉のうてなの姫宮は
風と洩入る隙も無き、
繩を切りても、綱まとひ、
もつれ、もつるゝ小田巻や。
果は一太刀切りにけり。
父の大臣は倒れけり。
姫も黑髪切りにけり。

戀も、恨も斷えにけり。
斷えし戀路を思はねど、
行手遮るおもかげは
琴の恨の尙切れず、
墨の衣に痕とむる、
涙月にや問はるらん。
我は泣かねど月曇り、
問ふも甲斐無き涙かな。
太郎はそぴら帆柱に
寄せて仰げば、星も泣く、
舟子も泣くか、落とさじと、
遂に目に持つ一しづく、
唯篝簗に洩らさんと、

一聲吹けば、龍も泣く。

雄波は何を恨むらん、
玆に隔ては無きものを、
空を叩けば、雲怒り、
月を奪へば、影消えて、
風も叛くや西東。
海は此世と亂れけり、
海も此世の中なりき。
海のあなたも同じきか。
憂ひ給ふな、いづくとて
同じ行衞は平戸より、
前は自在の波風を、

さなり、使うて進まなん。
こち吹かば福建や、
北吹かば廣東や、
溫州や、臺州や、
臨觀もよし、淮陽も、
遼陽も、天津も、
天につれて襲はなん。
吳山の雪と八幡の
此白旗を立てよやと、
呼べば答ふる五十艘、
四方の櫓を打叩き、
駒もかけ行く海原に、
平地百歩の浮城や、

八幡船ぞ鬼走る、
八幡船ぞ神早き。

二

「胡蝶よ、胡蝶よ、帳にとまれ。
牡丹は咲くとも、閨こそ春や。
蘭麝の香をいのちとしめて、
浮き立つ翼を金糸に縫はん。

胡蝶よ、胡蝶よ、枕にとまれ。
夜半の雨聽くひとりはさびし。
雲母の窓洩るおぼろの影に、
ゆかしき夢こそかすかに示せ。

胡蝶よ、胡蝶よ、北の野いかに。
南の園には日かげぞ弱き。
かざしの花びらなれより脆く、
くれなゐ、むらさき、幾たび變る。

胡蝶よ、胡蝶よ、東はいかに。
西には關より烟も見えず。
霞はいづくの戀路に迷ふ。
風さへ、なれさへ、などものいはぬ。」
胡蝶は歌と消えにけり。
朱のおばしま白鳩の
落つるは誰の使ぞや。
けさの鵲うれしきに、

問へど鸚鵡の只返す
瑠璃の壁さへ冷に、
床も象牙や、龍鬚の
むしろ五色わづらはし。
碧瓦波彫る長廊下
丹履痕無く夢引きて、
あゆみものうききざはしや、
登りなやめるうてなより、
虹をたどればたかどのゝ
鳳のそびらに日は斜。
かざしまばゆく見下せば、
園もまばゆきふかみぐさ、
色は幾色、くれなゐの

錦つらなるあなたには、
こがね幾すぢ、帶長き、
下に見えすくうすものや、
烟籠めたる紫と、
玉を重ねつ、また削る
葉さへ千よろづ、濃き、薄き、
上を亂すや一風に、
炎幾色、花燃えて、
香、烟と日を蒸せば、
光むせぶか、こがね散る
中に立ちたる香玉や。
銀釵射返すきらめきに、
鬢も綠の雲匂ひ、

頰は豐に紅さして、
目にはなさけの夢うるみ、
思こぼるゝ唇の
色も花びら吸ひにけん、
衿は一ひら稍解けて、
上着すべりつ、また落ちぬ
裾にゆらめく風の香や、
袖に染み入る花の氣に、
我とえ堪へで身を寄する
珊瑚に帶もまとふらん。
釧拔き取り花を洩る
蝶の翼に擲てば、
憎くやはづれて池に落ち、

魚ぞ驚く藻の光、
孔雀上るか鞦韆の
影力無くゆれにけり。
蘭草の燈日に代へて、
照らす夜光の盃や、
鵝頂のひさご葡萄吐き、
牡丹飲みては顏燃ゆる
あるじは姫を呼びて來つ。
「花の神來りしか、」
「神も來らず、鬼も來ぬ
長き一日の堪へがたや。」
「花の眞中にありながら、
花の王さへ寄せながら。」

「濃きに過ぎたる色香より、
櫻一枝眺めたや。」
「得易からざる需かな。
駒は波路を越え來れど、
鞍に乘せなば花散らん。
移し植うとも色變る、
國も異なる香には、
換えんよしなき一枝より、
うつす面影、畫屏風や、
手にも取らるゝ畫扇や、
鏡、香筥、厨子、几帳、
刀は我も得たけれど、
交易の途止めてより、

貢求めんよしも無し。」
姫は東を眺めけり、
羅福は北を顧みて、
「北斗の光なぞ強き、
慶雲いづくに迷ふらん。
甘露ことしも降らずや。
靈芝、瑞麥、白鹿に、
白兎は月に需めなん、
金丹未成らずや」と
呼べば方士は蛤に
不老の藥載せて來つ。
飲めば常世の春の身や。
四方の珍肴いざ嘗めん。

東の海の鰡裂き、
西山の鳳あぶれ。
松江の鱸まだ無きか。
熊の掌、豹の胎、
鶴のあつもの先吸うて、
盡きぬいのちは盃も
玉の色々過ごさなん、
美女の色々酌めよやと、
呼べば出て來る春の星、
何を笑むらん、雪洩らし、
袖は掩はぬ白鸞の
羽にまじるや黄龍と、
めぐるあるじの右左、

肉の陣こそゆたかなれ。
魚腦たきそへ、いざ酌まん、
肥えしは歌へ、聲揃へ、
痩せしは舞へや、身を輕く、
胡蝶の舞ぞおもしろき、
胡蝶と舞へと、一聲に、
胡蝶と立てば、風舞ひて、
胡蝶の群ぞ飛び來る、
胡蝶軍ぞ攻め來る。

胡蝶はつるぎ舞はしけり、
花は飛びちる肉の陣。
龍の鱗も飛びにけり、

鸞の翼も散りにけり、
玉は肴とまみれけり、
酒は藥と流れけり、
方士は鳥と飛びにけん、
僕は魚と遁れけり。
あるじは花に隱れんと、
うてな下れば、虹拔けて、
たよるおばしま珊瑚折れ、
瑠璃も、雲母も身を照らす、
光苦しき長廊下。
死なぬいのちもしばらくの
影に消えんと、葉に入れば、
炎一色花燃えて、

こがね、しろかね、皆焦がす
光なめゆくあめつちの
中を動かぬ香玉や。
裾も、上着もくれなゐの
頰も燿く火の色に、
鬢は亂れず雲晴れて、
目のみ靜に月仰ぐ、
こは火の花か、花の魂？
胡蝶のむれは觸れもせず、
あたりめぐりて只守る。
猛き炎は漸くに
うてな登りて、裾に這ひ、
帶に、袂に、まとふらん。

あなやと叫ぶ一軍の
聲の中より烟拔け、
炎ひらめく緋をどしの
鎧、甲も火を立てゝ
羽織吹き散る若武者は。
誰そや、太郎か、香玉を
脇にはさみてうてなより
花と胡蝶と飛びにけり。

三

火は消えぬ、
牡丹も消えぬ、館消えぬ、
殘る煙の柱より
西にむせびし月も消ゆ、

八重の塔より見渡せば、
國も幾たび消えにけん、
風英雄の火を吹きて、
汝列朝を載せて去り、
山河空しく日を磨りて、
朱氏の光も消えんとす。
星はいづくに迷ふらん、
北に、南に、雲凝りて、
城に落ち來る夜嵐に、
陵の草先泣けば、
獨怒るか梟の
おのが古巣を奪はれて、
破れし甍に羽ばたきし、

瓦壊るゝ壁の畫も、
剝げて痕無き天人の
影今更に立つやらん。
姫は耀く色さめて。
青き籌のかげ背け、
梢見る目は心無く、
心見る目は面長に、
黑きまなじり稍釣りし、
竹の姿のめづらしや、
太郎は花の火は消えて、
天女おぼろの光さへ、
色と殘れるたをやめや。
衣も、かざしも、髪も

暗き木かげに見かはせば、
國の違ひも忘れけり、
言葉通はぬ憾みさへ、
心忘れて空となる、
ほとり過ぎ行くほとゝぎす、
あはれ一聲何と啼く。
姫はみかどの魂の
廟出でしとふるひけり、
太郎は歸るふるさとの
誰の思や呼びにけん。
消えんとしてはまたあかき
火かげは何のしるしぞや。
二人は更に耳立てば、

梟笑ふか老の聲、
姫はいよ〳〵身を寄する、
胸冷に見まはせば、
石狗息吐く木蔭より
狹霧洩るゝは誰ならん。
「ないぶかりそ、我はこれ
馬祖師と名のる方士なり。
不老の藥僞りて、
羅福の舘に登りしに、
早くも寄する胡蝶とは、
心合ふたる若者や。
我も胡蝶の術知りて、
見えつ、隱れつ、自在なる

いくさ共々合はせなば、
朱氏に代るも易からん。」
「朱氏に代りて何かせん、
國を取りても尙滿たぬ、
心に違ふ妖術は
をこのしれもの惑はせや。
我は吾身をあからさま、
天が下横ぎらん。」
「さては何をか取らんとす。」
「こがね、しろかね、玉、寶、
總て一味に取らせなん、
分ち取れよ」とまきちらす、
跡に殘れるたをやめは

誰の獲ものと取らすらん。
「大軍來つ」と呼ぶ聲に、
太郎は太刀を取りて笑む、

日も白旗に笑みにけり。
かたきの旗はいくばくぞ。
千よろづとてもくろがねの
鏑一矢に碎かなん。
こがねに買ひし將軍に、
法に驅らるゝものゝふや、
假の道さへ强ひられて、
むねは此世のいのち戀ふ、
鈍き龍刀打ち落とし、

日の本の刀揮へやと、
螺の音一聲、虎吼えて、
光見ぬまに龍躍り、
枯木裂け散る白烟、
紋もひらめくまぼろしの、
蝶と消えては血を殘す、
草葉短き小袴や。
もろ手空切る裸武者、
二人一打四となり、
弦の響の盡きぬまに、
五、六、八、倒れ伏し、
秋の錦と野を染むる、
痕なまぐさき夏の市。

燒けや、燒けや、皆燒けや、
草も、林も、山も、野も、
燒て過ぎ行く國郡、
火焔の王と我ならん。
火焔の前に誰か立つ、
火焔の後に誰か伏す、
立つも、伏すも、皆燒て、
火焔の領となさんずと、
浙の東西燒きにけり、
江の南北燒きにけり、
通泰も燒き、崇德も、
嘉興も燒けば、旌德も、
太平も、江寧も、

南京までも燒きにけり。
千里一炬の荼毘の跡、
骨となりしはいくばくぞ、
一味分れて右左、
跡は處の曲者や、
元の遺臣も、逐客も、
我と流るゝ俠客も、
網を破りし囚人も、
網をくゞれる商人も、
酒に伴る詫人も、
里に忌まるゝ風の兒も、
寄せて使ひつ、取りつ去る、
炎飛びちる天が下、

炎知らせし朱氏の世も、
炎亂すはなどやらん。
伽藍の神もものいはず、
陽明の人早死して、
良知邪説と忌まれけり、
八幡の旗四方に照る。

四

山靜、
溪空し、
精舍の内ぞいと寂つ。
松春秋の筆措けば、
瀑太古より雪解きて、
霧と吹き散る日月の

光吸ふらん苔は肥え、
額「天眞」の文字も染む。
門の扉は蔦畫き、
巖刻める四方の壁、
竹の林は幾絃の
琴に詩うたふ鶴ありや。
一羽歸るよ一角の
翠微少しく雲切れて、
西湖迷ふは誰が夢ぞ。
八卦の田さへうらなはぬ
翌の胥海の波よりも、
玆のけふこそ靜なれ。
堂に祭るは文正か、

孔丘も見ゆ、釋迦も見ゆ、
達摩老子と睨み合ふ、
僧や、儒生や、道人や、
おのが木主を抱きては、
人の廡を借りて避く、
國の亂をいかにせん。
あはれ胡蝶に追はれけり。
胡蝶ゆめみし夢人も
うつゝ胡蝶に追はれては、
夢を思へどまゝならぬ
いのち苦しき露の身や、
露の身ながら火に死なん
思すゞしく、袖あつく、

あつき思に遁れしが、
寒き衣に秋風や、
伯夷火を吹く寒山の
鍋に小魚も無かりけり。
大國を治むるは
粥煮るよりも難きかな。
且坐して湯をすゝれ。
茶さへあらねばおのづから
酒との中を得たりけり。
是非は蕨の盡きぬまの
天を待つこそ樂しやと、
一人笑へば、一人泣き、
一人怒るか、ものいはぬ

中へかけこむたをやめや、
これも胡蝶に追はれけん、
あはれ落花をいかにせん。
風に任せて見るべきか。
そもまぼろしと拂ふべき？
鶴も煮るべきあやうさに、
花も寄せては、琴焚かん、
先溪河の水くめと、
桶を渡せば、打ちしほれ、
琴を焚くとはこゝろなや、
花は琴柱をたよりしに、
惡しき處へ來りけり、
惡しき時に逢ひにけり。

こがねの殿に生まれても、
玉だれの中春籠めて、
鏡さびしきおもかげを、
いつか撰られて召さるとも、
羊とまらぬ三千の
房にかげ無き君の恩、
晝さへ僞る秋風に、
胡地の草とも枯るもあり。
春を占むれば國亂れ、
うまやの泥を染むるもあり。
我は犧牲遁れしに、
父はいろどる檻堅く、
夢も許さぬ禁園の

扉開くはつまならで、
翼異なる胡蝶とは、
花の夢とも消えよとや。
花は散るとも、しばらくの
春のいのちはあるものを、
我は咲くまに風吹きて、
夢も見はてぬ悲しさよ。
悲しきものは女かな。
救ひ給へや御佛も、
父も、君も、聖さへ、
え救はぬとはつれなやな、
救はれぬ身の同じくは、
蝶の翼に散り行かん、

あはれ胡蝶ぞつれ行け、
胡蝶の君に任さん、
胡蝶は窓に入りにけり。
胡蝶の君のそれならで、
胡蝶の蟲の生憎に
袖をめぐりつ、裾に這ふ、
こゝろ惡るやと香玉は
袖を拂へば、尙寄りて、
右に、左に跡慕ふ、
早おそはるゝ夢心地、
あれよと叫ぶ聲掩ひ、
羽に抱けば目もくらむ。
あはれひらめく稻妻と

飛ぶよ、走るよ、羽裂けて、
馬祖師は谷に落ちにけり、
太郎は壇に立ちにけり。
姫はうれしとすがりよる、
胡蝶太郎は聲上げて、
「出でよ、出でよ、皆出でよ、
我此舍を陣とせん。」
「茲は塵無き精舍ぞや。」
「精舍ぞ殊にふさはしき、
名さへをかしき天眞の
山の精舍に旗立てん。」
「不道の賊の廣言や。」
「道はなれさへ能く知るや。」

女一人もえ救はぬ
道は何の道なりや。
賊と譏れど、ながぬしも
元は奪ひし國ならん、
奪ひ、奪はれ、幾たびか、
代り、代りて眞主とは、
天の笑を聞かざらん、
天の眞を誰か知る。
有るを損ねて、無きを益す、
天の道我爲しつ。
おのづからなる性に依る、
天の命我受けつ。
一切炎いなづまと、

佛の譬我見せつ。
我三教を奪ひけり、
我天眞の主たらん、
僧も、儒生も、旗持てや、
道士も太刀を執れよや」と、
姫の手を取り、壇登り、
「拜め」と呼べば颶風、
落葉地に這ひ右、左、
行きつ、めぐりつ、また上る、
文字もえ讀まぬ山がつや、
經に酒吹く惡僧や、
更に寄せ來る討手さへ
力合はせば、力得て、

筆にえうたぬ一蝶を
槍に、劔に、禪杖に、
今ぞ微塵と龍打てば、
氷打合ふくろがねに、
柱碎けて、鐘叫び、
柘榴朱を打つ蝶の羽。
一味の者はいかにぞや。
一味は遂に敗れけり。
敗れて走るものやある、
胡蝶の耻を思はずや。
羽蟻は耻を知らざりき。
太郎一人となりけるか。

夕霞、吉野は夢を籠めにけり。
洩るゝ色香は妹背山、
流渡りて世の中の、
よしや隔てもよしの川、
翼かはすか水鳥の
影も暮れ行く筏には
峰の紫載せ兼ねて、
月のしろかね待つやらん。
玉を砕けば朧々と
月も、霞も、夜櫻も、
共に解け合ふ戀ごろも、
一重分けても二重、三重、
奥に奥ある白妙の

果はいづくに迷ふらん。
吾戀人は此中か。
茲は靜の舞の跡、
峰の白雪心無く、
えにし隔てゝまた逢へぬ
歌の恨を誰か聞く。
同じ去らべは梓弓、
扉殘れどまゝならぬ
辨の内侍もこなたかや。
夢は歸れど、それもまた
いくさよばひに破られて、
果は甲に露そゝぐ
ねざめほのめくともしびの、

かげは女か、戀人か、
小櫻姫にあらずやと、
推せば別れしおもかげや。
君かいかにと走り寄る、
袖はふるへど暖き
涙身に染むうれしさよ。
「君は再歸らずと、
秋津島根を去り給ふ
後はいづくにおはしけん。
夢も追はれぬうなばらの
果は蝶よりかすかなる
夢に夢こそ重ねけれ。」
「蝶のいくさも夢なりし！

蝶と消えては唯殘る
花の戀路ぞうつゝなる、
吾故郷は玆なりき。」
「さてはまたもや出でゝ行く、」
「うかれごゝろは極まりて、」
「しぐれ晴れたる月の窓、」
「春の昔の夢かへす、」
「あはれあやしき香あり、
袖に牡丹の香あり。」
「なれの髪とて誰が爲に、
切ると告げしはいつはりか。」
「今を思うて殘しゝに、
よそに染むとは恨めしや。」

「心染まねど旅ごろも、
解くもまことの戀ならず。」
「戀は切らずにふるさとゝ
斷つはまことの心かは。」
「心斷ちてもふるさとに
歸る戀路ぞまことなる。」
「さてはならびて千代の山
花をかざして暮らさん」と
太刀をはづせば小几帳の
裾はおぼろに紋燃えて、
牡丹ものいふ香玉や。
「花は茲にもあるぞかし、
夢と迷ふはうらめしや、

戀のうつゝに足らずや」と、
扇取る手を振拂ひ、
「さてはなれこそ異國の
花の姿か、ねたましや。
戀は國の中限る
海の關さへ越ゆるとは、
戀のおきても知らざらん。」
「戀におきては無きぞかし、
國のへだても無きぞかし。
心通はゞ限無き、
思空にも上るらん。」
「心かよはす思にも
言葉かよはぬをかしさよ。」

「言葉かよはぬ憾には
姿ものいふうれしさよ。」
「姿異なるあやしさは？」
「いよゝゆかしき思かな。」
「思異なる本意無さは？」
「戀と調ふいのちかな。」
「あないつはりや、そら言や、
君ぞまことは知るならん、
定め給へやいづれぞ」と、
櫻爭ふ深見ぐさ、
花のいくさに迷うては、
蝶の翼も裂けぬらん。
戀に迷はなきものを、

戀に迷ふは戀ならず、
君は其身を戀ふならん。
君の心ぞいと薄き、
蝶の心ぞいと輕き、
輕き心は花びらに、
薄きえにしぞ是非も無き、
さらば〳〵と立ちて行く、
あはれしばし待てよかし、
戀を思へば海越えて、
歸る心は迷はねど、
牡丹追ひ來る夢見ぐさ、
夢とうつゝに迷うては、
蝶はいづれに宿からん。

かれにとまれば一ひらや、
これに移れば二ひらや、
三ひら、五ひら、花落ちて、
とまる甲斐無きちりしほや、
十ひら、百ひら、千よろづの
雪はうつゝと醒めにけり。

六

沙原や、沙原や、
沙原の果はいかにぞや。
山盡きぬ、河盡きぬ、
里も盡きたる沙原の、
果無き果はいかにぞや。
雪永劫の世を占めて、

月も、日かげも灰となり、
花も、草木も塵となり、
石も霰となるやらん、
風しろかねの劍ふり、
馬のたて髪さかだてば、
鵰も翼をむしられて、
寒き烟を望み行く。
胡笳はいづくに起るらん、
遠く、遠く、また近く、
近く、近く、また遙、
止むか、消ゆるか、跡ふるふ
響返して落つる雁、
それもふるひつ、またかすか。

我に從ふものは誰そ。
跡も吹雪に埋もれけり。
我に伴ふものは誰そ。
馬も吹雪に倒れけり。
馬を下れば、足を刺す
雪に埋もるゝ骨無きか。
誰の骨とて厭ふまじ、
骨を抱きて友とせん。
骨を探れど石氷る、
地には我のみ歩むなり。
天を仰げど星も無き、
世には我のみ迷ふなり。
我のみか、我のみか、

あめつちの中我のみか
我のみにてもなど足らぬ。
我あめつちのあるじぞや。
誰か吾世を襲ふらん。
何か我身に叛くらん。
雪は面を打ちにけり。
げに茲は雪の世か、
雪と此世を爭はん。
雪は小袖に靡くなり。
雪もなさけを知るならば。
共に今宵は眠らんに、
あな冷の心かな。
我は炎に世を燒きて、

烟消えても尙殘る、
心ひとつをいかにせん。
行くも果無く、歸るにも
此身ひとつをいかにせん。
吾ふるさとはいづくぞや。
まことの國はいづくぞや。
天の上に國ありや、
國の外に我ありや、
我の中に人ありや、
人の中に我ありや、
我の前に我ありや、
我の後に我ありや、
我の上に我ありや、

我の下に我ありや、
我は獨我なりや、
我も人も皆無しや、
我や人や、天や地や、
月や心や、日やいのち?
雪や——其身は氷りけり。
花や——其息絶えにけり。
戀や——いのちや——いかにぞや——
夢や——胡蝶や——いかにぞや——

後の羽衣

歌劇

人物

香津良姫
月天子
天人
天兒

景

一面雲霞、中に星の光。香津良姫上つて來る。

香津良　人の世の塵を拂うて羽衣や、
三保の松原立ちてより、
波もかゝらぬ清見潟、

富士の高根も雲となり、
霞分くれば霧晴れて、
風いつしか時知らぬ
中に光るは白玉か、
星の宮居は見えたり、
天の河原過行けば、
限り知られぬ千よろづの
かれも嬉し、これも嬉し、
今ぞ知るうれしさの
はては極まる月の園、
我故里ぞうれしき。

漸くあかくなる。一方より天人四人出て來る。

天人一　香津良の君か、いかにして、いづく、いつしか行

かれけん。

天人二　あか星か、ひこ星か、よばひぼしにやさそはれて、
天人三　雲のあなたに流れてか、雨に伴ひ走りてか、
天人四　霰のたより、音づれも、無くてさびしき霜の色、
天人一　衣に露を
四人　見たるぞや。
香津良　我も始めてうれしてふこゝろ知りける初旅は、星
よりも、雲よりも、遙に低き人の世に、
天人一　何、人の世に？
香津良　思はず下りてまゐりたり。
天人二　こはめじらしき旅路やな。
天人三　風に問うても語らねば、
天人四　名のみ聞きたる人間の

天人一　いざ物語

四人　　し給へかし。

香津良　げに云ふもよし、聞くもよし、樣を學びて今茲に

下界の姿示さばや。

春風や、春風や、

蕾ほのめく春風や、

花も柳も振分の

髮は額に、肩過ぎて

獨うつせば筒井筒、

水も春めく心かな。

天人一　こは何故の思ぞや。

香津良　天に知られぬ戀といふ、人の心の春ぞかし。

天人一　あやしき人の心かな。

（一の天人の手を取て前へ引出す）

香津良　あやしき人の心とは、

つれなの君の心かな。

君も男となり給ふ、

春を浮かれて櫻狩

夜のおぼろを獨臥す

我を夢にもよも知らじ。

天人一　夢は雲井に無きものを。

香津良　そはいつはりや西、ひがし、

朱に紫、色迷ふ

夢も花さく春の癖、

男心ぞいと憎き。

天人二　我は男も、名も知らず。

香津良　知らず、知られぬ人をさへ、

（二の天人の手を取て引出す）

思ひくらす恨めしさ、
云はんとすれど口滿ちて、
顔に汝さす胸の波、
女心ぞいと弱き、
弱きこゝろぞまことなる。

天人一　をかしき人の心かな。何としてかなはぬぞ。

香津良　それこそ人の世の習、或は親の心に、合はず。人の
さまたげ、世の關屋、さはり〳〵て末遂に、かな
ふとすればまた亂る、戀の心の多くして、かなた
に迷ひ、こなたに迷ひ、

（三四の天人を引出し）

亂れ心に我も亂れて、
憎くし、妬まし、恨めしやと、
追へば遁れ、走れば追ふ、

花の色香の盡きせぬ限り、
はてしもあらぬいさかひぞや。

天人合　あはれやな我手にて
こゝろひとつに繫ぎとめ
長きまことの樂を
夢に入りてか敎ゆべき。

香津良　そは無益ぞや、御身さへ
人の間に入るならば、
思ひかけられ、追ひかけられ、
羽衣さへも汚されん。
我も危うく奪はれし
中を漸く遁れたり。

天人合　其仇心皆洗ひ、

清きなさけに包まばや。

香津良　清きなさけに包むとも
夏としなれば名に狂ひ、
秋の風にも利を數え、
我やまさらん、我越えんと、
位爭ひ、國爭ふ、
つはものどもの戰は——

（暗くなる、天魔大勢出づ。）

魔　玆に顯はす欲界の
姿に引かれまゐりたり。
我思ふ人いづれぞ、
我花の君いづれぞ。

天人　あら恐ろしや、いかづちと

瑠璃の宮裂くいなづまや。
落ち行かんにも下界なり、
羽衣あれど鬼も飛ぶ、
天魔の力にひかれ、ひかれて、
何とかせまし、悲しやな。

（逃げまはる、鬼追ふ）

魔　嬉しやな、美くしや、
下界の色香身に染みて、
花は櫻か、桂姫、
折りて魔界へつれ行けや。

一　我こそこれよ。

二　否我よ。

合　妨げなさば、鬼とて、魔とて
共に餌食となすべきぞ。

皆香津良姫を追うて互に爭ふ。忽ち光さす。

あらまばゆしや此光、
地獄見通す我眼
忽ちくらむで見えわかず、
乙女はいづく、いづくぞや。

月天子青瑠璃の輦に乘り、白衣黑衣の天人大勢從へて出づ。

あなをびたゞし乙女の數、
それも見えず、これも見えず、
中に光るは誰ならん。
寄ればよろめき、躍ればふるひ、
飛びつかんにもたぢ〳〵
惜しや、悲しや、苦しやな、
惜しや、悲しや、苦しやな、

惜しや、悲しや、苦しやな、（皆消ゆ）

天人　云はん方なきおんめぐみ、

香津良　云はん方なき我あやまり、唯々免させ給へかし。

月天子　抑々何に引かれてか、下界に獨降りしぞ。

香津良　君はきこしめさゞりし、雲を貫く人間の叫に引かれ思はずも、行けば迷ふは世の常か。

月天子　夢より外に入られぬは
下界の人のはかなさよ。

香津良　其はかなさにいとゞ尙
眞守れる心あり。

月天子　それぞ涙を灑げかし、
露は花にも置くものを。

香津良　人の中にも身に沁めて

散るもいのちと笑むもあり。

月天子　そは餘りあるなさけより
地に下したる若者よ。

香津良　されば茲をも思ひ出で、技に現はす樣々や。

天人　其物語し給へかし、鬼もこれにはよも寄せじ。

月天子　げにいかならん、いにしへの、智恵は下界にかゞま
ずや。

香津良　さては面影傳へばや。

（白衣となる、宮殿樓閣現はる。）

見給へや、これこそは
寶樓閣を想ひやり、
朽ちぬすまひとかたどりし、
中にすうるは我姿、

彫りて刻みし面影に
我もほゝえむ色染めて、　（紫衣となる）
君も諸共描き取り、
かくさまゝに合せては、　（畫樣となる）
迦陵頻迦の聲學び、
舞ふや霓裳羽衣の曲。

月天子　茲のしらべと違はずや、共に比べて舞へや、舞へ。

（月天子白衣の天人を率ゐ、香津良姫黑衣の天人を率ゐて舞ふ。）

合唱　天津風、天津風、
いたくな吹きそ人の技、
雲の通路吹拂ひ、
こなたに引きて比べばや。
あはれ花の鬘飛ぶ、

ちるも妙なる羽衣に
塵はつきても薄霞、
拂ひ、拂へば汗出でゝ
眼まじろくやたがらす、
つきよみをとこ玆ぞかし。
不老の門の花染めず、
長生殿の雪消えず、
雲霧越えて尙思ふ
かなしみ、たのしみ、よしやよし。
いざや君も、我も舞へや、歌へや、誰が鼓、
打てや、鳴らせや、琴の音に、
花と舞ふは人の技、
雪と舞ふは天の技、

散ると見るは人の目、
廻ると見るは天の目、
散るか、廻るか、花か、雪か、
天も、地も、人もひとつ、
共に舞ふこそはてなけれ、
共に舞ふこそはてなけれ。

をろち

歌劇

人物

領主
其妻
姫
英雄
をろち
村民

景

正面高く、柱の樣な岩、下の方臺の樣になつてゐる。
後水、向削つた樣な斷崖、絶壁、上手下手、物凄い深林。
領主、其妻、姫を犧牲の體にして、村民從ひ出る。

合唱　黑雲は尾の上を這ひて、
夜の風木の間をうねる、
瀨の音は何をきしるぞ。

領主　おそろしや。
おそろしや、おそろしや、
おそろしや、おそろしや、
玆こそは定の岩か。
蒸す苔は鱗と光り、
空甞めて鎌首上ぐる、
これにこそ吾子は登れ。

妻　悲しやな、悲しやな。
悲しやな、悲しやな。
犧牲と白羽の矢立つ、
吾家は何の祟ぞ。

領主　罪も無く、報も無きに、
吾娘今ぞ取らるゝ！
母といふ聲も限りか。
父といふ聲も限りか。

妻　親心今ぞ限りか。
命とも愛でにし娘、
老いもせず、病も無きに、

領主　おそろしのをろちの餌とは、

妻　悲しやな、悲しやな。

二人　あはれやな、あはれやな。

村民合唱　さりながら我等の爲に
犧牲となるも譽よ。
女神ともあがめまつらん。

姫　あゝさらば、吾父！
今こそは吾母！
別れなん此世に
生きながら食まるゝ？
犠牲は世の爲
恐れねど悲しや。
吾父と別るゝ？
吾母と別るゝ！
きのふまでも愛でられ、
けさまでも惜まれ、
泣かるゝか、あしたは？
泣きてたべ、無き跡、

妻　いつまでも愛でよや。
泣きつゝも愛でなん
情のみ命と
領主　すがりつゝ死なばや。
な泣きそと止めても、
止まらじ涙は！
泣くばかり愛でんも
影無くば何せん。
三人合唱　悲しやな今こそ、
領主
妻　吾姫と別るゝ！
姫　父母と別るゝ！
村民合唱　あはれやな、あはれやな。

さりながら、あれ見よ、
雲降る、風迫る！
瀬の音はそこを渡るか。

姫　さらば父！
領主　あゝ吾子！
姫　さらば母！
妻　あゝ！
姫　さらば、さらば、さらばぞや。

岩の上へ登る、村民鏈に繋く。

領主妻合唱　これを見て歸るか、や。
此世には情は無きか。
天地は力ばかりか。
御空にも神はまさぬか。

村民　神なしや。
をろちこそいやちこに
祟りますあらふる神よ。
早行かん、歸れ、いざ〳〵
妻　いな玄ばし——
領主　歸らん？
妻　今一度——
領主　行かばや？
村民合唱　雲は卷く、風は舞ふ、
波はふるふ、岩もどよむ。
身の毛立つ草木。
領主、妻　おそろしや、おそろしや、おそろしや。
かなしやな、かなしやな、かなしやな。

皆恐れ、また悲みながら入る。

風は默しぬ、水も潜みぬ、
天地は息を殺しぬ。
彼の來る時は這ひ來る！
吾胸も這ふは何ぞや。

英雄稍急ぎ足で下手から出る。

英雄　何事ぞ少女の
此岩に繫がる？
姫　あはれこはいづくの人ぞ。
英雄　我よりもなれこそ
何故に繫がる？
姫　其故は——
英雄　其故は？

姫　許されぬ戀に？
英雄　あらず！
姫　定まりし夫を嫌ひて？
英雄　あらず！
姫　さらばなぞ？
罪の芽も無き花の少女の？
罪も無く、咎もなけれど、
恐ろしのをろちの餌と！
英雄　恐ろしのをろちとはなぞ？
姫　聞きたまへ、いつよりか、
此國の内外荒して、
逆はゞ總て呑むてふ
おそろしのをろちの牲に！

英雄　人の子ををろちの牲と？
さらばなど人と生きたえ？
人ならば蛇も斬れかし。
蛇となる人も斬れかし。
禍は斬りて拂ひて、
己が世と開く山川、
天地は勝ちて行くこそ。
うつし世の命ならずや。
姫　さてはかのをろちさへ？
英雄　何にても斬り拂へ！
我をこそ頼めよや。
姫　君をのみ頼まばや。
英雄　我立てば山靜。

我行けば海どよむ。
禍も吾力
伸ばし行く命かな。
人の世はいや高く、
いや健けく、美しく、
極まれは神となる
姫　ゐるしこそ我にあれ。
英雄　いさましや！
姫　美しや！
英雄　君ばかり力よ！
姫　力こそ情よ！
二人合唱　情こそ力か。
此力合はせて、

何にても拂はん！
雲も來よ、風も來よ。
いかづちか、荒浪？
稲妻と劈け！
早來れ、早來れ　早來れ。
唯頼め、唯頼め、唯頼め。

英雄
姫

英雄陰へ隠れる。をろち髪ふり亂し、黒ずんだ絲の衣長く曳き出る。

をろち　おもしろや、人の世を
吾思ふまゝにして、
うるはしの肉に飽き、
うるはしの色に飽き、
地は皆吾物と

嘗め盡すおもしろさ、
　おもしろさ、おもしろさ。（姫の側へ寄る）
殊にこは、殊にこは、
まだ淺き春の雪
いくばくを重ねし？
とこしへに少女よ。
げに、とこしへに美しき
軟草の髪の香や、
ぬくげなる玉の頰
一度は笑めかし、
誰が爲に笑むべき？
我爲に笑めよや！
いと惜きなが爲？

姫
をろち
姫

をろち　惜しとや、恐れずか？
姫　恐れずよ、今はまた！
をろち　恐れずと？　恐れずと？

威す様に睨む。姫自若としてゐる。

恐れずば示さん、
おそろしの力を！
風立てや、波立てや、
水くつがへせ、山倒せ！　（風波立つ凄い調）
地も皆塵と砕け！
天までも呑まばや！

瓠三流れて來る。をろち取上げる。

こは香も高き美酒や。（一々飲みながら岩をめぐる）
一口に月も呑め、

二口に日も呑まん。
三、銀の河呑みほして、
雲と吹け、霧と吐け、
吐きつ、呑みつ天地を
吾物にするをかしさや、
をかしさや、をかしさや——

大醉して伏す——英雄駈けて出て斬りつける。

をろち（飛起きて）誰そ我を？
英雄　なれよりも強き者ぞ！
をろち　我よりも？
英雄　健き者ぞ。
をろち　さる者は世にあらず！
英雄　なれあれば、我あり！

をろち　我あれば、我より——
英雄　高き者と知らさん。
をろち　山をさへ碎くを！
英雄　山よりも高きぞ。
をろち　水をさへかへすを！
英雄　水よりも深きぞ。
をろち　天地も呑みしを！
英雄　天地も復造るよ。
をろち　いざ、さらば造るか？
英雄　いざ、さらば破るか？
二人　いざ、…力比べん。

打合ふ、をろち斬られる、姫鏈を引きちぎつて飛下り英雄に取りつく。

をろち　口をしや！
姫　嬉しや！
英雄　こゝちよや、曙！
夜明ける、領主、妻、村民駈けて出る。
皆合唱　こゝちよや、曙！
こゝちよや、曙！
とこしへの喜！
あめつちの喜！

快濶な調で幕

大正七年十月廿五日印刷
大正七年十月廿九日發行

著作兼發行者　東京市本郷區駒込西片町十番地　高安三郎

印刷者　東京市麹町區紀尾井町三番地　金澤求也

印刷所　東京市麹町區紀尾井町三番地　元眞社

敬文堂書店